

聖ヨハネ・パウロ II 世

# 詩編について

## 第二卷

### ・ 第2週 朝の祈り

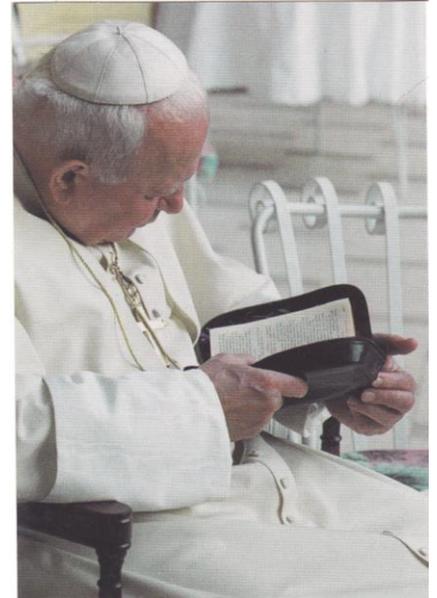
聖霊によって靈感された詩編の力は偉大です。

教会は典礼において詩編をもって祈ります。

ザアカイがキリストを見るために木によじ登った時ように、私たちは詩編のおかげで登ることができます。詩編はある意味では私たちを地上に結ぶすべてのこと、私たちを制限するすべてのこと、私たちを不信仰と悲観主義に導くすべてのことを乗り越える手段となります。

詩編は私たちにも神を自分の家に招き、神と共にいることと神の訪問を喜ぶことを可能にしてくれます。詩編は私たちの心に神がお入りになることによってもたらされる救いにおいて喜ぶ機会を与えてくれます。「今日、この家に救いが来ました…人の子は失われた者を救うために来ました。」

—聖ヨハネ・パウロ II 世



	日	月	火	水	木	金	土
第1 唱和	詩編 118	詩編 42	詩編 42	詩編 77	詩編 80	詩編 51	詩編 92
第2 唱和	ダニエル補 3	シラ 36	イザヤ 38	1 サムエル 2	イザヤ 11	ハバクク 3	
第3 唱和	詩編 150	詩編 19 前	詩編 65	詩編 97	詩編 81	詩編 147 後	

## 詩編 118

1, イスラエルの祈りの声に合わせて、一人のキリスト者が、ただ今わたしたちが拝聴いたしました詩編 118 を歌っている時、自分の中に特別な感動を覚えることでしょう。事実、彼は、新約聖書の中で新しい意味づけをされることによってこだましている2つの節を典礼の賛歌の中に見つけたのです。最初は第22節である「家造りの捨てた石が、もっともたいせつな石(角の親石)となった」。この一節はイエズスによって引用されています。イエズスは、殺意を抱くぶどう畑の使用人のたとえを語った後で、死と栄光というご自分の使命にこの一節を当てはめました(マタイ 21:42 参照)。この一節はまた、使徒言行録の中でペトロによって思い出されています。「このイエズスこそ、家造り人であるあなた方によって捨てられ、角の親石となった石です。この方以外に救いはありません。私たちが救われたのはこの方のみ名によるのです。天の下に人間に与えられたみ名は他にはないのです」(使徒 4:11-12)。エルサレムの聖チリロは次のように解説しています。「主イエズス・キリストは御一人子ですから、主イエズス・キリストは唯一の御方であると私たちは言っています。唯一の御方であると私たちが言っているのですから、誰か他にもいるのではないかなどと考えてはなりません。事実、彼は石と呼ばれていますが、死んだ石でも人間の手によって切り出された石でもありません。角の親石です。なぜなら、彼に信頼するものは見捨てられることはないからです」(聖チリロの公教要理, Rome1993, p. 312-313)。

新約聖書において詩編 118 から引用されたもう一つの節は、キリストがメシアとして荘厳にエルサレムに入場なさる時、群衆によって宣言されました。「主の名によって来られた方(日本語の教会の祈りでは「神の名によって集まる人」)に祝福!」(マタイ 21:9, 詩編 118:26 参照)。この叫びは、ヘブライ語で「私たちをお救いください」という「hoshia'na」を語源とする「Hosanna」によって縁取られています。

2, この輝かしい聖書的な賛歌は、過越しのハレルと呼ばれている詩編 113-118 の小さな詩編集の心臓部に位置しています。過越しのハレルは、その名の通り、ヘブライ人の過ぎ越しの礼拝と典礼暦年の大きな祭日の典礼で用いられている賛美の詩編です。行列の儀式は、独唱とコーラスによって、背景として聖なる都とその神殿によって、いくつかに分けられているこの詩編 118 のテーマとして取り上げられています。一つの美しい交唱がこの詩編を始め、そして終わりにしています。「神に感謝せよ。神はいつくしみ深く、そのあわれみは永遠」(詩編 118:1, 29)。

「いつくしみ」という言葉は、ヘブライ語の「hesed」という言葉の翻訳です。「hesed」は契約を結んだ友人である民に対する神の寛大な忠実さを表しています。この忠実さを賛美するために、3つの種類の民について語られています。イスラエルのすべての人々、「アロンの家」つまり司祭たち、「神をおそれる」人々です。「神をおそれる」という言い方は、信仰者と改宗者、つまり主の掟に従うことに憧れている他国に属する人々を含んでいます(詩編 118:2-4 参照)。

3, エルサレムの道路を歩いて行列が行われています。この詩編が「神に従う人の幕屋」(詩編 118:15)について語っているからです。感謝を捧げている人々の賛歌があります。その基本的なメッセージは次のようなものです(詩編 118:5-18 参照)。心配のさなかにあっても、信頼のたいまつを高く掲げ続けなければならない。主の力強い御手が悪に対する勝利と救いに向かって忠実な民を導いていてくださるのだから。

この聖なる詩は力強く生き生きとしたイメージを用いています。詩編作者は残酷な敵を蜂の

群れやあらゆるものを灰に変えながら進んでくる炎の柱に比べています(詩編 118:12 参照)。そこには、主に支えられている正しい人の激しい反応があります。彼は三度繰り返して「神の力によってかれらを打ち砕いた」(詩編 118:10, 11, 12)と、悪を破壊する介入に由来するヘブライ語の動詞を語ります。これらすべての背後には、神の力強い右の御手、すなわち効果ある介入があります。確かに弱々しく不確かな人間たちの手ではありません。この理由から、悪に対する勝利の喜びは打ち震えるような信仰の宣言へと導きます。「神はわたしの力、わたしの歌、わたしの救い」(詩編 118:14)。

4, こうして、行列はシオンの聖なる扉、「正義の門」(詩編 118:19)、神殿に到着します。ここで、礼拝をゆるされた会衆と司祭たちとの対話によって始まる第2の感謝の賛歌が歌われます。行列してきた会衆の名において独唱者が「正義の門よ、とびらを開け。わたしは中にはいって神に感謝しよう」と語り、「これは神の門、神に従う人がここからはいる」(詩編 118:20)と他の人々、おそらく司祭たちが応えます。

彼らは一斉に入っていく、その上に命の家を築く(マタイ 7:24-25 参照)ための堅固で安全な角の親石として、神殿の中で御自身を差し出しておられる主への感謝の賛歌を始めます。司祭の祝福が、自分たちの信仰を表し、祈りを立ち昇らせ、礼拝を捧げるために神殿に入ってきた信じる人々の上に降ります。

5, 私たちの眼前に展開する最後の場面は、祝いの雰囲気では枝を振りかざす聖なる踊りの喜びに満ちた儀式によって構成されています。「枝を携えて行列にはいり」(詩編 118:27)。典礼は主を賛美する喜びに満ちた祝いであり生活全体の表現です。この枝の儀式は、荒野でのイスラエルの巡礼の記念をするユダヤ人の幕屋祭へと思いを運んでくれます。この祭りには棕櫚やミルトス(やまもも)や柳の枝をもって行う行列があります。

この詩編によって心に呼び起こされるこの儀式は、枝の主日に祝われるイエズスのエルサレム入場においてキリスト者に手渡されました。キリストは、群衆によって「ダビドの子」(マタイ 21:9)と喝采を浴びますが、この群衆は「祭りに来ていた人々で、…棕櫚の枝を手に『ホザンナ!イスラエルの王、主の名によって来られる方に祝福あれ!』と叫びながらイエズスにあいさつするために出てきた」(ヨハネ 12:12-13)のです。イエズスの受難と死の前奏曲となったこの祝日において、始めに差し出された角の親石という象徴は、その完全な意味、すなわち栄えある復活を意味することとなります。

詩編 118 は、「神が造られた日」であるイエズスの復活のできごと、「家造りのすてた石がもつともたいせつな石(角の親石)となった」できごとを意識させることによってキリスト者たちを励ましています。この詩編によって、キリスト者たちは主への大いなる感謝を歌うことができるのです。「神はわたしの力、わたしの歌、わたしの救い」(詩編 118:14)、「きょうこそ、神が造られた日。この日をともに喜び祝おう」(詩編 118:24)。

## 第2週 日曜日 朝課 第2唱和

### ダニエル3章

1, ただ今拝聴いたしました歌は、ダニエル書のギリシア語版に見出される長く美しい賛歌の冒頭部分です。この歌は、バビロン王ネブカドネツアルの像を礼拝することを拒んだために炉に投げ入れられたヘブライ人の三人の若者たちによって歌われたものです。同じ賛歌の別な部分

が、時課の典礼の第1と第3主日の朝の祈りで見出されます。

ご存知のように、ダニエル書は神によって与えられた律法に従って生きるためにマカバイの一族が戦っていた時代(紀元前2世紀)に、選ばれた民の騒乱、希望、終末的期待を思い巡らしています。

炎から奇跡的に守られている三人の若者たちは、炉の中から、神に語りかける賛美の賛歌を歌います。この賛歌は連禱のようで、各節で繰り返す部分とその節ごとに新しくなる部分とがあります。似ていながらも一つ一つがユニークに音もなく空中を立ち昇っていく香のように、神に向かって立ち昇る祈願です。この祈りは自分の愛を表現したいと望んでいる愛深い人がその愛を何度も何度も繰り返しているかのように、繰り返すことをやめません。同じことを強調することで、内的な感覚や感情の強さや多様なニュアンスの違いを描写しています。

2, 私たちは、ダニエル書3章52-57節の宇宙的な賛歌の冒頭を耳にしました。この導入部は、賛美という仕事に参加する被造物の壮大なパレードに先立つものです。この賛歌全体を見渡す眺めは、広い意味での連禱として、この賛歌のテーマを作り上げている構成要素の連続を見出させてくれます。神に向かって6つの祈りが直接に語られていきます。これらの祈りは、神への賛美のために唇を開くようにという「造られたすべてのもの」に対する普遍的な呼びかけを含んでいます(ダニエル3:57参照)。

これが、今日私たちが考察しようとしている部分で、典礼はそれを第2主日の朝の祈りのために差し出しています。この後、この賛歌は、自分たちの主を賛美し崇めるようにと天地のすべての被造物を呼び集めることによって、延長されていきます。

3, この賛歌の冒頭の節は第4主日の朝の祈りで再び取り上げられます。私たちの考察のためには、今は2,3の事柄についてだけ選ぶことにいたしましょう。第1に、祝福への招きです。「あなたは代々にたたえられ…」は、最後には「神をほめたたえよ!」となります。

聖書の中には、互いに絡み合う祝福の2つの形があります。なによりもまず、神から降る祝福です。主は御自分の民を祝福されます(民数記6:24-27参照)。これは効果をもたらす祝福で、実り、幸福、繁栄の源です。それから、地から天に昇っていく祝福があります。神の寛大さから多くの祝福をいただいている人が、神を賛美し感謝し崇めながら祝福します。「心を尽くして、神をたたえよう!」(詩編103:1, 104:1)。

司祭たちは、両手を差し伸べることによって、たびたびこの神の祝福を仲介します(民数記6:22-23, 27, シラ50:20-21参照)。人間の祝福は、信じる者の集団から主へと立ち昇っていく典礼賛歌によって表現されます。

4, 交唱は私たちが考察している節の中で心を留めておくべきもう一つの事柄です。私たちは、冠をいただいた神殿の中で、信じる者の集団が「あなたは代々にたたえられ、あがめられる」という定型句を絶え間なく繰り返している間に、神の素晴らしいみ業を思い出しながら、独唱者が「神である主よ、あなたに賛美、…」という祝福を響かせているのを想像することができます。偉大な賛美である「大ハレル」詩編136では、民が「神のいつくしみは永遠」と繰り返しているところで、独唱者が、主が御自分の民へのご好意によってなされた数々の救いのみ業を数えあげていく、ということが引き起こされます。

私たちが、今、考察している詩編では、賛美の対象は、すべてに越えて「栄光の聖なる」神のみ名です。その宣言は、これもまた神の「栄光、聖なる」神殿の中に鳴り響きます。信仰の内に「玉座おられる」神を観想する時、司祭たちと民とは「すべての深みを見通される」神の眼差しを意識し、この意識は彼らの心から賛美を呼びさすのです。「あなたに賛美…あなたに賛美…」この理由から、「ケルビムの上に座し」、「大空」を住まいとされる神は、保護と安

全を感じている神の民にとっては、そばにいてくださる御方でもあるのです。

5、キリスト者たちに毎週訪れる復活祭である日曜日の朝に用いるようにとこの歌を差し出しながら、教会はイエズスの復活によって始まった新しい創造に私たちの目を開くようにと招いています。4世紀のギリシア教父であるニッサのグレゴリオは次のように解説しています。主の過越し(復活祭)によって「新しい天と新しい地が創造され、これまでとは違う刷新された人が上からの誕生(ヨハネ3:3-7参照)によって自分の創造主の似姿となったのです。…感覚的な世界を見る人は、目に見える事柄から目に見えない美を推論します。そのように、教会の創造による新しい世界を見る人は、あの手によって、すなわち、私たちの理性によって理解することのできる事柄という手段によって、人間の理解を超えるところにまで心を導いていただいて、その新しい世界の中にすべての人の中ですべてとなられた御方を見るのです」(ニッサのグレゴリオ作品集VI, 1-22節, p. 385)。

こうして、キリスト信者は、この歌を歌いながら、主イエズスの死と復活によって始められた第2の創造の輪郭を悟り、最初の創造による世界を観想するようにと招かれています。そして、この観想は、喜び踊るような足取りでキリストの唯一の教会に入るようにと、あの御手によって導いてくれるのです。

## 第2週 日曜日 朝課 第3唱和

### 詩編 150

1、ただ今、私たちの祈りを助けるために演奏して下さった賛美歌は、詩編の中の最後の詩編、詩編150でした。イスラエルの祈りの本の最後に鳴り渡る言葉は、文字通り純粋な神への賛美である「アレルヤ」です。この詩編が朝の祈りの中で2度、第2と第4主日に登場するのはまさにそのためなのです。

この短いテキストが、「hallelu」すなわち「賛美」という同じ言葉を10回も繰り返しています。あたかも永遠の音楽と歌のように、賛美という言葉は終わりが無いように思われます。ヘンデルのメサイアのあの有名なハレルヤ・コーラスのようです。神への賛美は、魂の継続する呼吸のようになります。「静かな高揚と祝祭の能力。これは人類への報いの一つです。ラビ・アキバがその弟子に差し出した一節によくまとめられています。『その日その日が一つの歌であり、その日その日のために一つの歌がある』」(A. J. Heschel 『Chi e l' uomo?(人間とは何者なのか?)』ミラノ1971, p. 178)

2、詩編150は、3つの時間を包含しているように思われます。最初は、始めの2節(詩編150:1-2)において、「大空にみなぎる神の力」、「その業は偉大」であり、「すべてを越える」がゆえに、「聖所」の中におられる「神」に私たちの眼差しを釘付けにします。それから、第2の時においては、まるで本物のミュージカルが進行していくかのように、シオンの神殿のオーケストラは、聖なる踊りと歌に伴われて主への賛美に巻き込まれていきます(詩編150:3-5b)。最後に、この詩編の最後の1節では(詩編150:5c)、全世界が、「いのちあるすべてのもの」、原語のヘブライ語に従いたければ「息あるすべてのもの」を伴って登場します。命そのものが賛美、創造主によってお造りいただいた存在するものたちから、その創造主に向かって立ち上る賛美なのです。

3、私たちの詩編150との最初の出会いにおいては、この詩編の最初と最後の部分について考

察するだけで十分でしょう。この2つの部分は額縁のように第2の部分、すなわちこの詩編の心臓部分を囲んでいます。その心臓部分については、次回この詩編が朝の祈りにおいて差し出されるときに考察することにいたしましょう。

「聖所」はこのミュージカルの第一幕の舞台であり、祈りに満ちたテーマを包含しています(詩編 150:1 参照)。原語のヘブライ語では、その中で神がお住みになっておられる清らかで超越的な「聖なる」領域について語っています。それは、黙示録が説明しているように、永遠の完全な子羊の典礼が祝われている天と楽園との地平線を反映しています(黙示録 5:6-14 参照)。神の神秘は、その中で聖人たちが完全な交わりに迎え入れられる、光と喜び、啓示と愛の場なのです。何故、70人訳聖書やブルガタ訳聖書が「聖所」という言葉の代わりに「聖人たち」という言葉を使っているのかが、理解できます。「主の聖人たちの中で主を賛美せよ!」

4, 私たちの考察は、御自分の大空にみなぎる力を表された神によって書かれた偉大なみ業について強調しながら(詩編 150:2 参照)、天から地へと移ります。これらの力あるみ業は詩編 105 において描写されています。この詩編は、「そのすべての不思議なわざを語れ」(詩編 105:2)、また「神が行われた不思議なわざを思い起こせ、その救いのしるしとさばきのことばを」(詩編 105:5) 思い起こせ、とイスラエルの人々を招いています。それから、この詩編作者は「アブラハムと結ばれた」(詩編 105:9) 契約、ヨゼフのすばらしい物語、エジプトからの奇跡的な解放と荒野での旅、最後に土地という贈り物を思い起こさせています。もう一つの詩編は、困難について語ります。神は、御自分に「叫びをあげた」人々をそこから解放してくださったのです。解放していただいた人々は繰り返し、次のように願われています。「人の子らよ、神のいつくしみと、そのれた不思議なわざに感謝せよ」(詩編 107:8, 15, 21, 31)。

こうして、詩編 150 においては、「そのわざは偉大」であることについての言及を、ヘブライ語原典が語っている通り、神が救いの歴史の中に撒き散らした力ある「不思議な業」(詩編 150:2 参照) として理解することができます。賛美は、創造主であり贖い主である神への信仰宣言となり、創造し救うこと、命を与えること、解放することによって表された神の愛を祝う祝祭となります。

5, 私たちは詩編 150 の最後の節(詩編 150:5c (6) 参照) にやってきました。先ほど申し上げましたとおり、ヘブライ語は「息をする」という言葉を神を賛美する「生き物」を指すのに用いますが、同時に人間にそなわっている何かしら親密で意味深いことをも指しています。

すべての創造された命はひとつの創造主への賛美の賛歌となるべきであり、より正確に言うなら、被造物としての人間はこの賛美の歌隊の中で第1の役割を持っているのです。すべての被造物のスポークスマン(代弁者)である人格を持った人間を通して、命あるすべてのものは主を賛美するのです。私たちの命の息は、自己認識、意識と自由を前提として(箴言 20:27 参照)、宇宙の中で反響している命全体の歌となり祈りとなるのです。

私たち皆が互いに心を尽くして「詩編、賛歌、霊の歌をもって主に向かって歌い、音楽を奏できるように」(エフェソ 5:19) と語り合うのはそのためです。

6, 詩編 150 を書き写す時、ヘブライ語の写本の作者たちは、しばしば、エルサレムの神殿の至聖所におかれているあの有名な七つに枝分かれした燭台メノラを描きました。このようにして、私たちの「お兄さんたち」が常に祈ってきた祈りにとって真に正当な「アーメン」であるこの詩編についての美しい解釈を示しています。すなわち、この詩編が語っているように、「息あるすべてのもの」がそうであるように、すべての人は、あらゆる楽器—トランペット、ハーブ、チター、ドラム、踊り、弦楽器、フルート、鳴り響くドラ、打楽器、シンバル—と、自分の才能に応じて作曲したさまざまな様式の音楽をもって、絶え間ない賛美と感謝の祈りの内に、

至聖所の前におかれたメノラのように燃え続けるために存在しているのです。

御自分が創造なさった全宇宙の完全な声である御子との一致の内に、私たちもまた神の玉座の前で絶え間ない祈りとなりましょう。

第2月曜日 朝課 第1唱和

## 詩編 42

1, 乾ききった荒地で溢れる出る水の流れを憧れながら、鹿が乾ききった喉で嘆きの声を上げます。ただ今、歌われました詩編 42 は、このような有名なイメージをもって始まります。私たちは、そこにこの文章の深い霊性の象徴を見出すことができます。詩編の専門家たちによれば、この詩編 42 は続く詩編 43 に非常に深い関係があります。詩編 43 は、神の民の祈禱書を作成するために、前の詩編 42 から離された場所に置かれてしまったのだそうです。これら二つの詩編が出来事や展開によって一致していることに加えて、二つとも同じアンティファンによってドラマティックに中断されているのです。「わたしの心はなぜ、うちしずみ、嘆き悲しむのか。神に希望を置き、賛美をささげよう。わたしの救い、わたしの神に。」(詩編 42:6, 43:5)。詩編 42 の中では二回繰り返され、三度目には詩編 43 繰り返されているこの叫びは、救い主として再び確かに御自身を現してくださるであろう神に信頼を置くことによって、憂鬱を追い払う目的で、祈って人が自分自身に向かって語りかけている招きです。

2, さて、この詩編の最初のイメージに戻りましょう。グレゴリオ聖歌のメロディや、パレストリーナのポリフォニーの傑作 *Sicut cervus* を聞きながら黙想できたら楽しいことでしょう。乾いた鹿は、離れたところにおいでになる、しかし、非常に必要とされているように思われる主に向かって、体と魂と全存在とをもって祈る人の象徴です。「わたしの心はあなたを求め、神のいのちにあこがれる」(詩編 42:3)。ヘブライ語では、「nefesh」という一つの言葉が同時に「心」と「喉」を意味します。ですから、ここで祈っている人の体と心とが、何ものにもまさる、自然で、本質的な神への憧れによって無我夢中にされている(詩編 62:2 参照)、と言うことができます。長い伝統が「呼吸すること」を祈りの一つの典型として述べてきたことは偶然ではありません。呼吸がいのちを与えるということは原始的で必要不可欠で基本的なことからです。

三世紀の偉大なキリスト教の著作家オリゲネスによれば、人間の神探求は、いつでも発展していくことが可能であり、また発展していくことが必要でもあることから、それは決して終わることのない冒険である、と言っています。民数記についての彼の説教の中で、オリゲネスは次のように言っています。「神の知恵を探求する道を旅する人々は、永遠の家を建てることはありません。かえって、移動式の天幕を持っています。それは、彼らが絶えず移動しながら新天地をめぐる、はるかに広がる地平線を前にして、自らの眼前に横たわる、さらなる道を進んでいくためです」(民数期について 第 XVII 説教)。

3, この祈りの基本的な構造を述べていくことにいたしましょう。三つの活動によって構成されていると言えますが、そのうちの二つがこの詩編に属し、他の一つは次に続く詩編 43 の中で見出すことができますので、第三の点については後に考察することにいたしましょう。第一の場面(詩編 42:2-6 参照)は、今はもう参加することができなくなってしまった美しい典礼の祝いによって幸福であった過去の思い出によってかり立てられている深い憧れを表現してい

ます。「思い起こせば心は高鳴る。喜び祝う人々とともに、感謝と賛美の声を合わせて、わたしはみ前に進み出た」(詩編 42:5)。

この典礼が行われている「神の家」は、この信仰厚い人がかつてはしばしば訪れていたエルサレムの神殿のことです。そこはまた、神と親しむための中心地であり、エレミアが歌った「生ける水の泉(2:13)」でもあります。今、命の泉の喪失に引き裂かれる彼には、その目にきらめく涙の水しかありません(詩編 42:4 参照)。神殿における礼拝の間に主へと立ち昇っていった、昔の祝いの祈りは、今や涙と嘆きと嘆願に取って代わられました。

4, 不幸なことに、この悲しみに満ちた場面は落ち着いた喜びに満ちていた過去と対比されています。詩編作者は今、自分がシオンから遠く離れたところにいることを見出します。ヨルダン川の水源地、そこから川が流れ出しているヘルモン山の頂、そして私たちには分かりませんが、ミザルという山について言及されていることから、彼を取り巻いている地平線は、聖地の北に位置するガリラヤ地方のものです(詩編 42:7 参照)。多かれ少なかれ、私たちは今、ヨルダン川の水源地となっている滝、約束の地全体を流れていくこの川の水源地となる多くの滝が滑り落ちていく地方にいます。しかし、これらの水はシオンの水のように乾きを癒してくれるものではありません。かえって、詩編作者の目にとっては、すべてのものを荒廃させる騒々しい洪水のようなものに過ぎません。彼は、これらの水が命を拭い去ってしまう怒り狂った激流のように自分の上になだれ落ちてくるのを感じています。「あなたの激流のとどろきは、ふちからふちにこだまし、さかまく波はわたしの上を越えていく」(詩編 42:8)。聖書において、混沌、悪、神の裁きは、崩壊と死をもたらす大水によって描写されています(創世記 6:5-8、詩編 69:2-3 参照)。

5, このような挿入の象徴的価値は、後になって明らかになります。それは、ここで祈っている人の敵、恐らくは、この信仰のある人が追放されたこの遠隔地に住んでいる異教徒たちを表しています。彼らは、「神はどこに」(詩編 42:11, 14)と皮肉に尋ねながら、正しい人を軽蔑し、この人の信仰のゆえに彼をあざ笑っているのです。そこで、彼は神にむかって自分の苦悩を立ち昇らせます。「どうしてわたしを忘れられたのか」。試練の日に不在であるように思われる主に向かって語られる「どうして」は、典型的な聖書的嘆願です。

叫びを上げる乾ききった唇、この苦痛に満ちた魂、泥の海の中でおぼれかかっているこの顔に向かって、神が沈黙を守れましようか? もちろん、そんなことはおできになるはずがありません! ですから、祈っている人は再び希望するようにと勇気付けられるのです(詩編 42:6, 12 参照)。第三の活動は、次の詩編 43 の中で見出されます。それは、信頼と感謝の言葉を用いながら(詩編 43:1, 2a, 3a, 4b 参照)神に向かって捧げられる信頼に満ちた祈願なのです。「わたしは神の祭壇のもとに行き、わたしの喜びである神の前に進む。神よ、わたしの神よ、立琴をとってあなたをたたえよう」。

## 第2週 月曜日 朝課 第2唱和

### シラ 36 章

1, いわゆる詩編書というような、旧約の神の民の正式な祈りの書というのではありません。聖書のあちこちのページが、神のみ言葉への応答として主に向かって立ち昇る歌、賛歌、詩編、嘆願、祈り、願いによって飾られているのです。このようにして、聖書は神と人間との対話、

神のみ言葉、恵みと愛のみ言葉によって封印された互いの交わりを産み出しているのです。

ただ今私たちが「すべてのものの神」(シラ 36:1)に対して語りかけたのは、嘆願の一種です。これは、シラ書に含まれています。シラとは、マカバイの指導のもとで生活していたイスラエルの解放が始まる時代、紀元前 190-180 年頃に、自分の考察や勧告や賛歌をまとめた賢者です。この書の序文で作者自身が私たちに語っているように、紀元前 138 年、この賢者の孫はより広い読者や弟子たちのグループにこれらの教えを授けるために、自分の祖父がまとめたものをギリシア語に翻訳しました。

シラ書はキリスト教の伝統によれば「Ecclesiasticus(外典)」と呼ばれています。他の「知恵文学」と共に、この書もヘブライ人の聖書には含まれていないにもかかわらず、最終的にはいわゆる「Veritas Christiana(キリスト教の真理)」を差し出しているということになったのです。こうして、この知恵文学によって提案されている諸価値は教父時代にはキリスト教要理教育に組み込まれ、修道院制度の世界においてはキリストの弟子たる者の実践的な振舞いの手引書となりました。

2, 時課の典礼の朝の祈りの中で単純な形に構成されたシラ書 36 章の祈願は、いくつかの鍵となるテーマを産み出しています。

何よりもまず、イスラエルへの愛のために、彼女を虐げる異国の民に対して介入してくださるようという神への嘆願を見出します。かつて神は、ご自分の民を敵の手に渡すことによってその罪を罰した時に、ご自分が聖なる者であることをお示しく下さいました。ここで祈っている人は、自分を虐げる者たちの力を打ち破り、新しいメシア的な時代を打ち立ててくださることによってご自分の偉大さを示してくださるようにと願っています。

確かに、この願いはイスラエルの祈りの伝統を反映していますし、聖書的な言い回しに満ちています。確かな意味で、ちょうどこの作者が生きていた、シリア-ヘレニズム的な異国の支配者たちによる過酷で厳しい支配下に置かれているような、迫害あるいは虐げの時代に使われるための祈りの典型と考えることができます。

3, この祈りの初めの部分は、神がいつくしみをもって、起こっている出来事に注意を払ってくださるようという主に向かう熱烈な呼びかけによって始まっています(シラ 36:1 参照)。しかし、すぐに、特徴ある動詞の連続によって強調された神のみ業の方へと注意が向けられます。「わたしたちを顧み…いつくしみとあわれみの光を現して…おそれを起こさせてください…手をふりあげて…あなたの力を示してください…新しいしるしを現し…不思議なわざを新たにし…あなたの力を輝かせて…」。

聖書の神は悪と直面する時に無関心ではられないのです。たとえ、神の道は私たちの道ではなく、神の時間や計画が私たちのものとは違っていたとしても(イザヤ 55:8-9 参照)、神は犠牲者たちの側に立ち、暴力を振るう者、虐げる者、いつくしみを示すことのない勝利者たちを厳しく裁かれるのです。

神の介入は破壊を求めるものではありません。ご自分の力とご自分の愛の忠実さを示すことによって、邪な者の良心の中にさえ、その者を回心へと導くことのできる戦慄を生み出すことができになるのです。「あなたのほかに神のないことをわたしたちが悟ったように、かれらにも悟らせてください」(シラ 36:4)。

4, この賛歌の第 2 部は、さらに積極的な視野をもって始まります。事実、最初の部分では、自分たちの敵に対する神の介入を願いましたが、第 2 部ではもはや敵については言及していません。かえって、イスラエルに対する神のご好意を求め、選ばれた民と聖なる都エルサレムのために神のいつくしみを乞い求めています。

流刑の地に送られた人々の帰還という夢は、たとえ彼らが北王国に属する人々であろうとも、この祈りの目的となっています。「ヤコブの一族を一つに集め、先祖の遺産を返し与えてください」(シラ 36:10)。これは、約束の地全体を占領していた幸せな日々にならざるを得なかったような、全イスラエルの再生のための祈りです。

この祈りをより熱烈なものとするために、ここで祈っている人は、イスラエルとエルサレムを神に結び合わせる関係について力説します。イスラエルは「あなたの名で呼ばれている民」、「あなたが長子と呼ばれたイスラエル」となるように計画されています。エルサレムは「あなたのお住みになるとうとい都」です。この関係がより親密で栄光あるものとなっていきます。「あなたへの賛美をシオンに満たし、神殿を栄光で満たしてください」(シラ 36:13 参照)。神のみいつに満たされて、すべての民を引き寄せることになっている(イザヤ 2:2-4, ミカ 4:1-3 参照)エルサレムの神殿によって、主はご自分の民を栄光で満たして下さるのです。

5, 聖書において、苦しむ人々の嘆きは、絶望に終わることは決してありません。かえって、常に希望へと開かれています。主はご自分の子らを見捨てることはなさらない、ご自分がお造りになった人々をそのみ手から取り落とすようなことはなさらない、という確信にもとづいているのです。

典礼によって選ばれた箇所は、この祈りの中のひとつの美しい表現を省いています。「初めからあなたのものである造られた者たちに証しをお与えください」(シラ 36:14)。永遠から、神は、ご自分の民となるために呼び集められたすべての被造物のために愛と救いのご計画をお持ちです。それは、聖パウロによって「聖霊によって聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されたもの…神が、私たちの主イエズス・キリストの内に成し遂げてくださった永遠の目的」(エフェソ 3:5-11)と認識されていたご計画です。

## 第2週 月曜日 朝課 第3唱和

### 詩編 19:2-7

1, 天空を明るく照らし、その光線の暖かさによって恩恵をもたらしてくれる太陽は、原初から人類を魅了してきました。様々な方法で、人類はこの生命と幸福の源に対して、詩情豊かな情熱をもって、自分たちの感謝を表してきました。この素晴らしい詩編 19 がその最初の部分で述べていることは、この詩編が単に力強い祈りの賛歌であるばかりではなく、太陽そのものと地上に降り注ぐその光線とに向かって語りかける詩情豊かな歌ともなっているのです。このような方法で、詩編作者は、天に輝き、彼らの地方においてはその焼き尽くすような熱気によって昼を支配している天体を称揚した古代の近東の吟遊詩人たちの長い列に加わります。このことは、私たちに、紀元前 14 世紀に Pharaoh Akhnaton によって作られ、神格化された太陽盤に献上された有名な賛歌を思い起こさせます。

しかし、聖書の人にとっては、こうした太陽への賛歌について、ある根本的な相違があります。太陽は神ではなく、唯一の神であり創造主であられる御方に奉仕する被造物です。創世記の次の御言葉を考えるだけで十分でしょう。「神はおおせになった。『天の大空に光る物があって、夜と昼を分け、季節のしるし、日や年のしるしとなれ。』…神は二つの大きな光る物と星を造り、大きな方に昼を治めさせ、小さな方に夜を治めさせた。…神はこれを見て、良しとされた」(創世記 1:14, 16, 18)。

2, 典礼によって選択されている詩編の各節を考察していく前に、全体を一瞥することにい

たしましょう。詩編 19 は、二枚折の板絵のようです。第一の部分—これは今日私たちが祈った部分ですが—には、創造主への賛歌を見出します（詩編 19:2-7）。この御方の神秘的な偉大さは、太陽と月の中に表されています。この詩編の第二の部分では、神の掟であるトーラーへの知恵深い賛歌を見出します。二つの部分に共通しているテーマがあります。神は太陽の輝きによって世界を照らし、聖書的啓示の中に含まれている御自分の御言葉の輝きによって人間を照らされるのです。まるで二重の太陽のようです。第一は、創造主の宇宙的公現です。第二は、私たちの救い主である神の自由で歴史的な

顕現です。神の御言葉であるトーラーが「太陽」の様子について書いているのは偶然ではありません。「そのみ旨はきよく、目を開く (enlihgten 啓発する)。(詩編 19:9)」

3、では、この詩編の第一の部分を考察することにいたしましょう。この詩編は、もろもろの天についての素晴らしい擬人法をもって始まっています。この聖なる作者にとって、天は神の創造のみ業に対する雄弁な証人として登場します（詩編 19:2-5）。「天」は神のみ業の素晴らしさを「語り」、「告げる」のです（詩編 19:2 参照）。昼も夜も創造という偉大な知らせを伝達する使者として描かれています。彼らの証は沈黙の証ですが、宇宙全体に響き渡る声のように力あるものとして感じられます。男性でも女性でも、彼らの内奥の霊的視野、すなわち宗教的な直感が浅はかであるために悟りきれない時でも、魂の内的なまなざしによって、この世界はおしではなく、創造主について語ってくれているということは発見することが出来るはずです。古代の賢者が言っていますように、「創造されたものの偉大さと美しさから、類推によってその根源としての作者を理解させるはずである（知恵 13:5）」。聖パウロもまた語っています。「世界の創造の時から、神の目に見ない完全さは、神によってなされたみ業のうち知性によって認められるはずである（ローマ 1:20）」。

4、この賛歌は太陽に場所を明け渡します。輝く天体は、婚姻の床で夜を過ごし、暗闇のただ中から飛び出して、その確かな歩み始める勇敢な英雄、という靈感された詩によって描写されています（詩編 19:6-17）。太陽は勇者と比較されています。私たちの惑星全体がその抵抗できない暖かさのうちに包まれている間も、この勇者は、疲れることも弱りはてることもありません。ですから、太陽は、神の命令によって、宇宙空間で征服と競争を日々の務めとする花婿、英雄、勝利者と比較されているのです。そして、ここにおいて、詩編作者は、大空の中で輝きながら、その熱によって全地を、そして大気を覆い、その光を逃れることのできる場所はない太陽を指し示しているのです。

5、詩編における太陽という比喻は、キリストが暗い墓から勝利者として脱出し、復活という新しい命の充満へと入られたことの勝利を描いています。聖土曜日の読書課でビザンチン典礼は歌います。「太陽が夜の後に新たにされた光のまぶしい輝きのうちに昇るように、ああ、御言葉よ、あなたもまた、死して後、婚姻の床を出る時に、新しい光で輝き渡る。」復活節の読書課の第一の Ode は、キリストの復活という出来事を宇宙的な啓示と関係付けています。「もろもろの天よ喜べ。大地よ天と共に叫べ。全宇宙は見えるものも見えざるものもこの祝い参加しているのだから。私たちの永遠の喜びであられるキリストは復活されたのだ。」そして、第三の Ode は加えて言います。「今日、全宇宙と もろもろの天、大地と深遠とは光に満たされ、全被造物は歌う、私たちの力と喜びであられるキリストの復活を。」最後に、第四の Ode は次のように結ばれています。「私たちの過ぎ越しであられるキリストは御自分の愛のきらめきをもって私たち皆の上に輝く正義の太陽のように墓からよみがえられた。」

ローマ典礼は、東方典礼のようにキリストと太陽との比較においてそれほど明白ではありません。しかし、復活節の朝の祈りをあの有名な賛歌をもって始めるときに、キリストの復活の宇宙的な影響を描き出しています。「Aurora lucis rutilat, caelum resultat laudibus, mundus

exultans iubilat, gemens infernos ululat — 夜明けはその真紅の光線を広げ、もろもろの天は賛美の叫びを鳴り響かせる。喜びに満ちた大地はその勝利を高らかに告げる。うめき苦しむよみの国は荒々しくもこれに答える。」

6、この詩編のキリスト教的解釈は、被造物の中に現存する神の御言葉を見出すようにと招く詩編 19 の基本的なメッセージを取り消すわけではありません。もちろん、この詩編の後半部分に述べられていますように、もう一つの、光そのものよりもより尊い、み言葉への称揚、すなわち聖書的啓示があります。

いずれにせよ、注意深い耳と開かれた目を持つ人々にとって、被造物は雄弁に語る言葉を持つ最初の啓示のようです。それはもう一つの聖書のようです。その文字は世界中に存在する莫大な被造物によって描かれています。聖ヨハネ・クリゾストモは言います。「もろもろの天の沈黙はトランペットを吹くよりも大きな音で響き渡る声です。この声は、私たちの耳にではなく、私たちの目に向かって叫んでいます。これらの天をおつくりになった御方の偉大さを。(PG 49 105)」また、聖アウグスチヌスは言います。「天空は、その壮大さ、美しさ、秩序によって、その造り主についての驚嘆すべき説教者です。その雄弁たるや、全宇宙を満たしています。(PG27 124)」

## 第2週 火曜日 朝課 第1唱和

### 詩編 43

1、ただ今拝聴いたしました詩編は、何回か前の一般謁見において解説いたしました詩編に続く詩編で、その詩編に密接なつながりをもっているものです。事実、詩編 42 と詩編 43 は一つの歌で、同じアンティファンによって3つの部分に分けられています。「わたしの心はなぜ、うちしずみ、嘆き苦しむのか。神に希望をおき、賛美をささげよう。わたしの救い、わたしの神に」(詩編 43:6, 12, 42:5)。

これらの言葉は、独り言の形式ですが、この詩編作者のもっとも内奥の感情をあらわにしています。自分のいる場所はシオンから遠く離れている、シオンこそ神の現存しておられる特別な場所であり、信仰者たちの礼拝の場なのに、ということが、彼の訴えのポイントです。このために、彼は、不信仰な人からの無理解と攻撃が原因で孤独を感じているからです。自分の孤独と神による沈黙はひどくなっていくばかりです。しかし、詩編作者は、自らに向かって、美しい希望の言葉をもって、信頼するようにと宣言することによって、この悲しみに抵抗します。彼は信頼し、「わたしの救い」と呼んで神を讃えます。

詩編作者は、前の詩編(詩編 42)では自分自身に向かって語り掛けるだけでしたが、詩編 43 においては、神に向かい、自分に敵対する人々から守っていただくために自らを委ねています。もう一方の詩編の中で述べられた祈願(詩編 42:10 参照)をほとんど文字通りに取り上げながら、ここで祈っている人は、今度は神にむかって自分の孤独な叫びを効果的に述べています。「どうしてわたしを見捨てられるのか。どうしてわたしはしいたげられ、嘆きのうちに歩むのか」(詩編 43:2)。

2、しかしながら、この時、祈っている人は引き離された暗い時が終わりに近づいていることを感じ、再び神の住まいを見出すために自分がシオンに帰るという確信を表明しています。聖

なる都は、もはや、前の詩編の嘆きのような(詩編 42:3-4 参照)失われたふるさとではありません。かえって、彼がそこに向かって進んでいる喜びに満ちた目的地となっています。シオンへの帰還の案内者は神の「光」と神の「まこと」です(詩編 43:3 参照)。さばきとのがれ場と呼びかけられている(詩編 43:1-2 参照)主ご自身がこの旅の最終的な行き着く先なのです。3つの動詞が彼の願い求めている介入を特徴付けています。「あなたのさばきを現してください」、「わたしの訴えを聞き入れ」、「わたしを救い出してください」(詩編 43:1)。これら3つの動詞は、試練の暗い夜に燃え立ち、すぐそこまで来ている救いの夜明けを指し示す3つの希望の星のようです。

この詩編作者の体験に関する聖アンブロジウスの読み方は、意味深いものです。イエズスのゲッセマネにおける祈りに当てはめているのです。「預言者が、わたしの心はうちしずんでいる、と語っていることに驚いてはなりません。主イエズスご自身が仰せになったではありませんか。『今、私の心はうちしずんでいる。』事実、イエズスは私たちの弱さ、私たちの感じやすささえも、ご自分の身に負ってくださったのです。イエズスが死ぬばかりに悲しんでくださったのは、死ぬことのためではなく、このためです。進んで受け入れてくださった死は、悲しみの原因にはなりえません。全人類の幸福はこの死のおかげなのです。…ですから、その成就をもたらす恩恵を待ちながら、イエズスは死ぬばかりに悲しんでくださったのです。このことは、イエズスご自身が証ししてご自分の死についておおせになったことを表しています。『私には受けなければならない洗礼がある。それが成し遂げられるまで、私はどれほど苦しまなければならないことか』」(『ヨブとダビドの忠告』 Rome 1980, VII, 28, p. 233)。

3, さあ、詩編 43 について続けましょう。詩編作者の眼前には、彼が憧れている解決が開かれようとしています。命の泉と神との交わりへの帰還です。主の愛深い忠実さである「まこと」と、主の善の啓示である「光」は、神ご自身がそのみ手で信じる者を連れて憧れの目的地に導くために天から送ってくださった使者として描かれています(詩編 43:3 参照)。

シオンとその霊的中心地へと引き寄せられて近づきつつある彼の状態が順を追ってたいへん雄弁に語られていきます。最初に神殿とダビドの城郭が建てられている聖なる丘が現れてきます。それから、舞台には「すまい」が登場します。さまざまな空間と建物のあるシオンの聖所がそこを飾っています。それから、生贄と民全体の正式な礼拝の場所である「神の祭壇」。最後の決定的な目標である喜びの神。初めには遠くはなれて黙っておられた神の抱擁、神との親しい出会い。

4, この時点で、すべては歌、喜び、祝いとなります(詩編 43:4 参照)。原語のヘブライ語では、「わたしの喜びである神」と言います。最上級を表現するセム語的語り口です。詩編作者は主がすべての幸せの源であり、主が卓越した喜びであり、主が平和の充満であると強調したいのです。ギリシア語 70 人訳では「若さ」を意味するアラマイ語の同義語に従ったようで、「私の若さの喜びである神に」と翻訳していますので、主が与えてくださる喜びの新鮮さと熱烈さについて考えるよう導かれます。こうして、ラテン語のブルガタ訳では、ギリシア語からの翻訳で「ad Deum qui laetificat juventutem meam」(私の若さに喜びを与えてくださる神に)となっています。この形において、この詩編は、主との出会いへの導入の祈りとして感謝の祭儀の典礼に先立って、祭壇の元で唱えられていました。

5, 詩編 42-43 のアンティファンの特徴的な嘆きが最後に響き渡るのは、この詩編の最後(詩編 43:5 参照)です。ここで祈っている人は、まだ神の神殿に到着していません。彼はまだ試練の暗闇に覆われたままです。しかし、今、彼の眼前には将来の出会いの光が輝き、彼の唇は、すでに喜びの歌の響きを味わっています。この時点で、訴えは希望によって大きく特徴付けら

れています。この詩編の解説の中で聖アウグスチヌスは、実際、次のように述べています。「神に希望をおきなさい。魂が神に対して不安を抱いている人に向かって、神はお応えになります。希望の内に生きなさい…『見えているものを望むことは希望ではありません。けれども、私たちが、私たちには見ることのできないものを望んでいるのなら、私たちはそれを待つて忍耐することに感謝するでしょう』(ローマ 8:24-25 参照)」(「詩編解説 I」 Rome 1982, p. 1019)。

こうして、この詩編は、この地上の巡礼者であり、悪や苦しみと接触する中にいながらも、歴史の最終地点は死の淵ではなく救いをもたらす神との出会いであるという確信を抱いている自分を見出している人の祈りとなるのです。この確信は、キリスト者たちにとってますます強くなるのです。彼らに向かってヘブライ人への手紙は述べています。「あなた方が来たのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、天に登録されている長子たちの集い、すべての人の裁き手である神、完全にされた義人たちの霊、イエズス、新しい契約の仲介者、アベルの血よりも雄弁に語る流された血であります」(ヘブライ 12:22-24)。

## 第2週 火曜日 朝課 第2唱和

### イザヤ 38 章

親愛なる兄弟姉妹の皆様

1, 詩編と共に組み合わされたさまざまな賛歌の中で、時課の典礼は「ユダの王へゼキアが病氣から回復した後の歌」(イザヤ 38:9)というタイトルのついている感謝の賛美歌を私たちに差し出しています。これは預言者イザヤ書の歴史的叙述(イザヤ 36-39 章参照)のなされている箇所に見出されるものです。この歴史は、いくぶん変更されて列王記下 18-20 章に繰り返されています。

朝の祈りの典礼に続いて、今日私たちが拝聴し、私たちの祈りのために用いた歌の2つの歌詞の中には、感謝の祈りの2つの典型的な態度が述べられていました。まず、この人は、主が苦悩に満ちた悪夢からご自分に忠実な者を解放してくださったことを思い起こしています。次に、この人は、命の回復と救いのために感謝の内に喜んで歌っています。

正しい支配者であり預言者イザヤの友人でもあった王へゼキアは、預言者イザヤによって死に至るものであると告げられていた重い病のために打ちひしがれていました(イザヤ 38:1)。「そこで、へゼキアは顔を壁の方に向けて、主に祈っていった。『主よ、私を思い出してください。私はどれほどみ前で忠実に心をこめて歩み、あなたの御目にとって良いことをしてきたことでしょうか。』へゼキアは苦悩の内に泣いた。主の言葉が預言者イザヤに臨んだ。『へゼキアのもとへ行って告げなさい。あなたの父ダビドの神である主は言われる。私はあなたの祈りを聴きその涙を見た。見よ、私はあなたの命をあと 15 年延ばす』(イザヤ 38:2-5)。

2, この時点で、感謝の歌が王の心からあふれ出します。先に述べましたとおり、彼はまず過去を見ていました。イスラエルの古代の概念によれば、死は人を地下の生活、ヘブライ語の Sheol へと引き入れるのです。そこは、光は締め出され、命は衰え果て、ほとんど幽霊のようになり、時は止まり、希望は消え去り、何よりも、もうこれ以上神を呼び求めることも礼拝の内に神にお会いすることもできなくなってしまうところです。

このためにヘゼキアは、何よりもまず、自分の命が死の境まで滑り落ちた時に語った苦悩に満ちた言葉を思い出しているのです。「わたしは生きている人々の国で神を見ない」(イザヤ 38:11)。詩編作者もまた、自分の病の日にこのような仕方で祈っています。「死者があなたをあなたを思い、死の国(Sheol)でだれがあなたをたたえるであろうか」(詩編 6:6)。ですから、死の危険から解放されたヘゼキアは力強く喜びに満ちて確信することができたのです。「きょう、わたしがあなたをたたえるように、生きている者、生きている者だけが、神よ、あなたをたたえる」(イザヤ 38:19)。

この主題について、復活の光の中で読むならば、ヘゼキアの歌はひとつの新しい響きを帯びてきます。すでに旧約において、この偉大な光のひらめきは、祈っている人が「あなたはわたしを死の国に見捨てられず、あなたを敬うものが朽ち果てるのを望まれない。あなたの前には溢れる喜び、あなたのもとには永遠の楽しみ」(詩編 16:10-11, 詩編 49, 詩編 73 参照)と確信をもって宣言した時、詩編の中に映し出されていました。知恵の書の著者は、義人の希望は「不死の完成」(知恵 3:4)であることを断言することを恥じませんでした。この地上に生きている間の神との交わりの体験は破壊されることはないという確信させられていたからです。永遠不滅の神に支えられ守られて、私たちは死を越えて留まるのです。なぜなら、「正しい人の魂は神の手の中にあり、いかなる苦しみもそれには触れ得ない」(知恵 3:1)ののですから。

なによりも、神の子イエズス・キリストの死と復活によって、永遠の種が撒かれ、私たちの死の腐敗の中で成長しました。旧約に基づいて使徒の言葉を繰り返すことができるのは、このためです。「そして朽ちるべきものが朽ちないものを着、死すべきものが死なないものを着せていただいたのです。こうして、次のように書かれた言葉は実現しました。『死は勝利に飲み込まれた。死よ、おまえの勝利はどこにあるのか。おまえのとげはどこにあるのか』」(I コリント 15:54-55, イザヤ 25:8, ホセア 13:14 参照)。

4, しかしながら、ヘゼキア王の歌は、被造物としてのはかなさを思い巡らすようにとも私たちを招いています。このイメージは示唆に富んでいます。人間の命は、幕屋という遊牧民的象徴によって描写されています。私たちは常に巡礼者でありこの地上では寄留者なのです。また、衣というイメージも当てはめられています。衣が織られている時に、糸が断ち切られ仕事がさえぎられれば、未完成のまま残されてしまいます(イザヤ 38:12 参照)。詩編作者も同じ衝撃を感じています。「いのちは束の間、生涯はあなたの前に無に等しい。人は皆、立ってはいるが、通り過ぎる風。人は影のように動き、むなしく騒ぎまわる」(詩編 39:6-7)。私たちは、「70年80年生きるとしても、その年月はむなしく労苦に満ち、すみやかに過ぎ去り、わたしたちも消えうせる」(詩編 90:10)ということを考えながら、自分たちの限界についての意識を取り戻さなければなりません。

5, 病と苦しみの日、ヘゼキアが、自分の泣き声をツバメのさえずりや鳩のうめきにたとえるという詩的な表現を使って(イザヤ 39:12 参照) 私たちに教えてくれているように、神に嘆きを訴えることは正しいことです。ヘゼキアは、神はまるで自分の骨をことごとく砕いてしまう「しし」のような敵対者だ(イザヤ 39:13 参照)、と感じるのも辞さないかのように、神に向かって絶えることなく訴え続けています。「神よ、苦しんでいる私をささえてください」(イザヤ 39:14)。

主は、苦しんでいる者の涙に無関心ではなく、常に、私たちが期待していることに合致する方法ではなくとも、答え、慰め、救ってくださいます。それが、ヘゼキアが私たち皆に向かって、神はご自分の被造物をお見捨てになることはないという確信をもって希望し、祈り、信頼するようにと励ましながら、最後に告白していることです。「神は、わたしを救ってください。わたしたちは生きている限り、神の家で琴をかなでよう」(イザヤ 39:20)。

6, 中世のラテン教会の伝統は、西方修道院制度のもっとも重要な神秘家の一人クレルボーの聖ベルナルドによるヘゼキア王の歌についての靈的解釈を保ってきました。ベルナルドの Various Sermons 第3巻がそれです。この中で、聖ベルナルドは、ユダヤの支配者によって生きられた一つ一つの生涯のドラマに当てはめ、自分の体験も挿入しながら、次のように書いています。「わたしはいつも神をたたえる。朝から晩までそうするようにと私は学んできました。自分たちに良いことをしてくださる時だけたたえる人たちのようにはなく。また、確かな時だけ信頼するが試練の時には逃げ出す人たちのようにでもありません。かえって、聖人たちと共に言いましょ。『私たちは、神の手から良いものを受けたのだから、悪いものも受けるべきではないか。』このようにするなら、一日のいかなる時も、神にお仕えする時となるのです。夜にはすすり泣き、朝には喜び。夜には苦難に身を沈め、それから朝の幸福を楽しむのです」(Scriptorium Cralallense, Sermo III, n. 6, pp. 59-60)。

このように、聖ベルナルドは、この王の祈りを、夜と試練の暗闇においても、日中と喜びの光の中でも、同じ意志の堅固さと落ち着きをもつべきキリスト者の祈りに満ちた歌を描写するものとして読んでいるのです。

## 第2週 火曜日 朝課 第3唱和

### 詩編 65

1, 朝の祈りの詩編をたどる私たちの旅は、その最後の部分(詩編 65:10-14 参照)で魅力的な春、新鮮で色とりどりの輝きに満ち、喜びに満ちた声の響き渡る景色によって私たちを魅了する賛美歌に導いてくれました。

事実、詩編 65 は2つの異なった響きを効果的に組み合わせた幅広い構造を持っています。まず、罪の許しと神の親しい出現という歴史的なテーマ(詩編 65:2-5 参照)、それから海と山々の対決における神のみ業の宇宙的支配(詩編 65:6-9a 参照)、最後に春の描写が展開されます(詩編 65:9b-14 参照)。夜明け、中東の荒涼とした景色、被造物に対する主の忠実さ(詩編 104:13-16)がもたらす豊かな実りを表現している雨。聖書にとって、被造物は人類にとっての家であり、罪はこの世界の秩序と完全性に対する攻撃です。ですから、回心とゆるしは宇宙の完全さと調和を建て直すのです。

2, この詩編の最初の部分で、私たちは、シオンの神殿の中にいます。自分たちが積み上げた倫理的悲慘さに押しつぶされながら、民は悪から救っていただけるようにと祈るためにそこで群れをなしています(詩編 65:2-4a 参照)。信者たちは、一度に自分たちの罪からの許しをいただき、神によって迎え入れられた、神と親しくなった、神の宴に導いていただく用意が整った、神との親しみの祝いに与っていると感じています(詩編 65:4b-5 参照)。

神殿の中におられる主は栄光に満ち、宇宙的な輪郭で描き出されています。実際、神は「地の果ての望み、遠い島々の希望、…あなたは偉大な力に満ち、みなぎる力で山々をすえられる…海のとどろき、波の響き、民の騒ぎを静められる。地の果てに住む人はあなたの不思議なわざを恐れ、東と西の果てにあなたは喜びをもたらされる」(詩編 65:6-9)。

3, この創造主である神の祝いの中心で、私たちはひとつのできごとに焦点を当てたいと思います。主は、聖書において混沌の象徴であり、創造の秩序に抵抗する(ヨブ 38:8-11 参照)海の騒ぎを支配し静めることがおできになるということです。これは、単なる虚無に対するだけで

なく、悪に対しても、神が勝利をおさめられたことを称揚するひとつの方法です。「民の騒ぎ」、すなわち高慢による抵抗が「海のとどろき、波の響き」というモチーフにともなわれているのはこのためです。

聖アウグスチヌスは次のように解説しています。「海はこの世界の姿で、塩気のために苦く、嵐のために荒れており、そこでは自分たちの強情さと墮落した食欲をもつ男女が、互いに欲するままにむさぼりあっている魚のようになっていました。残酷に波立つこの大荒れの海、苦い海をご覧ください。兄弟の皆さん、こんな風になってはいけません。主は『地の果ての』すべての人の『望み』なのですから」（『Esposizione sui Salmi (詩編解説)』II, Rome1990, p. 475)。

この詩編の結びが示唆していることは簡単です。混沌の上に秩序を据え、この世界と歴史の中にある悪に終りを定めてくださる神は、ここで祈っている人が神の清めに対する確信をもって、神殿の中に携えていって差し出している悪と罪に打ち勝ち、ゆるしてくださる、ということです。

4, この時点で、また別の水が場面に登場してきます。命と実りをもたらす水、春、大地を潤し、靈的にはゆるされた信じる者に新しい生命を再び差し出してくれる水です。この詩編の最後の数節(詩編 65:10-14 参照)は、すでに申し上げましたとおり、たいへん美しく意味深いものです。神は、早魃と冬の凍結によって乾燥しきった大地の渇きを、雨を降らせることによって潤します。主は、その働きによって麦を育て青草を生い茂らせる農夫のようです(ヨハネ 15:1 参照)。主は地を耕し、用水路に水を通し、土くれをならし、自分の畑のすみずみまで水で潤します。

詩編作者は、息とし生ける被造物を変容させる創造主の、大地に対する愛深いみ業を描写するために、10 者動詞を用いています。実際、そのすべての部分は「喜びにあふれて歌」(詩編 65:14) っています。衣服を着るという象徴に関係のある3つの動詞が示唆に富む考えを示してくれます。「丘一面に喜びがこだまする、野山は羊の群れに満ち、谷は小麦におおわれ」(詩編 65:13-14)。このイメージは羊の白さによって輝いている牧場を指すのでしょうか。おそらく、丘は「人の心を喜ばせる」(詩編 104:15) ぶどう酒を産み出してくれるしるしであるぶどうの木で覆われているのでしょうか。谷は収穫の黄金のマントをまとっているのでしょうか。12 節では、冠を思い出させていますが、おそらく、祝いの宴の客たちの頭に載せられている花冠(イザヤ 28:1,5 参照)を思い出しているのでしょうか。

5, 行列をなしているかのように、被造物がみなそろって、踊ったり歌ったり賛美したり祈ったりしながら自分たちの創造主であり君主である方に向かいます。再び、自然は神のみ業の雄弁なしるしとなります。自然は、その上に書き込まれている創造主のメッセージを明らかにする用意が整って、すべての人々に対して開かれている1 ページなのです。「造られたものの偉大さと美しさから、その原作者が類推によって推察されるのです」(知恵 13:5, ローマ 1:20 参照)。この抒情詩において、神の観想と詩とが豊かに混ざり合い、礼拝と賛美になっています。

しかし、この歌全体を通して詩編作者が予期しているもっとも情熱的な出会いは創造と贖いの一致です。ちょうど春になるとそうであるように、創造主によって再び大地は甦り、人は贖い主のみ業を通して自分の罪から立ち上がるのです。創造と歴史は、荒れ狂い破壊する水を静めるとともに、清め、豊かさをもたらす、乾きを潤す水を与えてくださる主の救いをもたらす眼差しという摂理のもとにおかれているのです。主は、事実、「失意の人をささえ、その傷をいやされ」ながら、「雲で天をおおい、地に雨を降らせ、野山には若草がもえる」(詩編 147:3, 8) のです。

こうして、この詩編は神の恵みの賛歌となるのです。聖アウグスチヌスはその解説の中で、

この二つとない優れた賜物を再び思い起こさせてくれます。「主なる神は、あなたの心の中に語りかけておられます。私はあなたの宝である。この世が約束するものの後を追ってはならない。正義を行い、正しさからあなたを誘い出すために人が約束するものを嫌うのであれば、神があなたに約束してくださるものに注意を払いなさい。この世が約束するものの後を追ってはならない。むしろ、この世の創造主が約束してくださるものに心をとめなさい」(同上 p. 481)。

## 第2週 水曜日 朝課 第1唱和

### 詩編 77

1, 詩編 77 を含む朝の祈りを唱えることによって、典礼は、新しい一日の始まりがいつも明るくものであるとは限らないということをおもひ起こさせます。空が嵐を予感させる雲に覆われている暗い日々の夜明けのように、私たちの人生にも悲しみや恐れに満たされた日々のあることを知っているのです。このようなわけで、私たちの祈りは夜明けからすでに、嘆き、嘆願、助けを願うものとなるのです。

この詩編は、繰り返し語りかけ、信頼によって深く動機付けられ、神が介入してくださるという確信に満ちて、神に向かって立ち昇っていく的確な祈りです。事実、詩編作者にとって、主は、輝く天のかなたに冷静に鎮座ましまして、私たちの心配事には無関心な皇帝ではありません。このような印象は、時折私たちを捉える苦い問い掛けを生じさせるために、信仰の危機をもたらすことさえあるのです。「神はご自分の愛と選びを否定されたのだろうか?神はかつて私たちを支え、幸福をもたらしてくださった時のことをお忘れになられたのだろうか?」。これから見ていくように、このような問いは私たちの贖い主、私たちの救い主である神への信頼を新たにすることによって拭き去られるのです。

2, それでは、激しい苦悩という劇的な響きをもって始まり、穏やかさと希望へと徐々に進んでいくこの詩編の道をたどってまいりましょう。まず何よりも、私たちの前には、悲しい現実と神の沈黙についての嘆きがあります(詩編 77:2-11 参照)。助けを求める叫びは物言わぬ天に立ち昇っていき、哀願するかのようには両手は挙げられ、心臓は悲しみのために鼓動しそこなったようです。涙と祈りによって眠れぬ夜、7 節に言われている通り、一つの歌が心に甦ってきます。魂の底には途絶えることなく悲しみに満ちた繰り返しが響き続けます。

痛みが限界に達し、人が悲しみの杯を取り去ってくださるよにという願う時(マタイ 26:39 参照)、言葉は炸裂して驚嘆すべき問いかけとなります(詩編 77:8-11 参照)。この大きな叫びは神と神の沈黙の神秘とに向かって問いかけます。

3, 詩編作者は、なぜ主は自分のことをいつまでも拒むのか、なぜ主はその愛、救いの約束、優しいいつくしみを忘れ、ご自分の出現とみ業を変えてしまったのか、と不思議がっています。脱出の救いをもたらす不思議な業を成し遂げた「すべてを越える方が力を隠し」、今、麻痺してしまったかのようです(詩編 77:11 参照)。それはまさに、ここで祈っている人に信仰の危機をもたらす真の「拷問」です。

本当に、神は意識がないのか、残酷な存在、あるいは、能力がなく無関心で力がないために救うことのできない偶像のような存在になってしまったのでしょうか。詩編 77 の最初の数節は、試練と神の沈黙の時の信仰のドラマ全体を包含しています。

4, しかし、希望するための理由が存在しています。第2の祈りから現れてくることがそうで

す。これは、痛みに満ちた暗い日であろうと、勇気をもって信仰に堅忍することを再び提案しようと試みている、ある賛歌に似通っています。この詩編作者は過去の救いを歌っているのですが、それは、創造の時とエジプトの奴隷状態からの解放の時の光の現われです。苦しみに満ちた今の時は、歴史の中に蒔かれた一粒の種である過去の救いの体験によって照らされるのです。この種は、死んだのではなく、葬られただけであって、春には再び芽吹くのです(ヨハネ 12:24 参照)。

そこで、詩編作者は重要な聖書的概念に訴えています。それは「記念」です。これは、単なるあいまいでなつかしい思い出ではなく、誤りえない神の働きへの確信です。「わたしは神のわざを思い起こそう、過ぎた日の偉大なわざを」(詩編 77:12)。過去の救いのみ業に対する信仰を宣言することは、主が常に働きつづけておられる、だから今の時にも、という信仰へと導いてくれるのです。「神よ、あなたは聖なる方、…偉大なわざを行われる神」(詩編 77:14, 15)。こうして、逃げ道も光もないように思われる今の時は、神への信仰によって照らされると希望へと開かれるのです。

5, この信仰に支えられて、詩編作者は、おそらくさらに古いもの、おそらくシオンの神殿の典礼において歌われたものである、もう一つの賛歌へと目を向けます(詩編 77:17-20)。主が、自然界、特に混沌と悪と苦しみの象徴である水を踏みつけながら歴史の場面の中に飛び込んでこられるという、音のない神の出現です。否定的な力に対する神の勝利のしるしである、水の上にある神の道というイメージはたいへん美しいものです。「あなたは海の上を歩き、大海原を渡る。その足跡を見た者はだれもない」(詩編 77:20)。そして、私たちは、キリストが水の上を歩かれた、というキリストの悪に対する勝利を雄弁に語るイメージを思い起こします(ヨハネ 6:12-20 参照)。

最後には、神が「モーセとアロンの手によって、…羊の群れのように」(詩編 77:21)ご自分の民を導かれたことを思い起こしながら、詩編作者は一つの確信へと迷わず導いています。神は私たちを救うために戻ってこられる。神の力と目に見えない手は、神がお立てになった牧者や導き手たちの目に見える手を通して、私たちとともにある。この詩編は、憂鬱の叫びによって始まりましたが、私たちの魂の偉大な牧者(ヘブライ 13:20; I ペトロ 2:25 参照)に対する信仰と希望の心呼びさますことによって終わるのです。

## 第2週 水曜日 朝課 第2唱和

### I サムエル 2 章

1, 一人の女性の声が、命の主への賛美の祈りの中へと今日私たちを導きいれてくれます。事実、サムエル記上巻の物語において、私たちが取り上げようとしている賛歌を、自分の子である小さなサムエルを主にお捧げした後で歌ったのはアンナです。サムエルはイスラエルの預言者となり、彼の活動は、ヘブライ民族の新しい政治形態、王制への移行によって特徴付けられることとなります。この王制において、不幸なサウル王や栄光に満ちたダビド王が指導者の役を演じるのです。アンナはこの物語の語るところによれば、「主が彼女の胎を閉ざされた」(I サムエル 1:5)がゆえに、過去に苦しんだ歴史をもっています。

古代のイスラエルにおいては、不妊の女性は、自分の夫が、不明瞭で不確実な来世観において重要な要素であった、先祖の記憶を継承する子孫を持つことを妨げることから、しおれた

枝、死んだも同然の存在と見なされていました。

2, しかし、アンナは命の神に信頼をおき、祈りました。「ああ、万軍の主よ、もし、あなたのはしための悩みに御目をとめてくださるのでしたら、そして私を思い出し、あなたのはしためをお忘れではないなら、あなたのはしためにひとりの息子をお与えください。そうすれば、私はこの子の生涯のすべての日々に彼を主にお捧げいたします。」(I サムエル 1:11)。そして、神はこの卑しめられた婦人の叫びを聞き、彼女に、乾いた幹から芽生えた生きた枝(イザヤ 11:1 参照)であるサムエルをお与えくださったのです。人間の目には不可能なことが、主に捧げられたこの子どもにおいて、触れることのできる現実となったのです。

この母親の唇からあふれ出た感謝の賛歌は、もう一人の母、おとめのまま留まりながら神の霊によって懐胎したマリアによって取り上げられて、新たに表現されました。事実、イエズスの母の「マニフィカト」において、私たちはアンナの歌のこだまを聞き分けることができます。この理由から、アンナの歌は『旧約のマニフィカト』として知られているのです。

3, 事実、学者たちは、聖書の著者がアンナの唇に、引用や示唆によって他の詩編をレースのように飾ることになる素晴らしい詩編を置いたということに注目しています。

もっとも目立つ位置に、ヘブライ人の王のイメージが現れます。より強力な敵によって攻撃されますが、彼のそばにおられる主は、強い者の弓を折ってくださるので(I サムエル 2:4)、最後に彼は救われて勝利をおさめるのです。この歌の最後は意味深いものです。主が荘厳な出現によってこの場面に登場なさいます。「神は、はむかう者を打ち、すべてを越える方は雷鳴をとどろかせる。神は地の果てまでさばき、王に力を授け、油注がれたものを高く上げられる」(I サムエル 2:10)。ヘブライ語では、この最後の言葉はまさに「messiah」で、油注がれた者という意味であり、この王的な祈りをメシア的希望の歌に変容することを私たちに可能にしてくれます。

4, 私たちは、アンナの感情を表現しているこの賛歌の中の感謝に満ちた2つのテーマを強調したいと思います。まず、マリアのマニフィカトの中においても目立っていることです。神がもたらしてくださった運命の逆転です。強い者の弓は折られますが、弱い者は「力を得る」のです。豊かな者はパンのために働くようになりますが、飢えた者は支配者たちと共にぜいたくな宴会の席につくようになるのです。貧しい者は塵の中から立ち上がらせられて、「栄光の座」を与えられるのです(I サムエル 2:4, 8 参照)。

この古代の祈りにおいて、マリアが、救い主である神の歴史の中で成し遂げられたことと見なしている7つのみ業の流れを、たやすくたどることができます。「神はその力を現わし、思いあがる者を打ち砕き、権力をふるう者をその座からおろし、見捨てられた人を高められる。上に苦しむ者はよいもので満たされ、おごり暮らす者はむなしくなって帰る」(ルカ 1:51-54)。

これは、もっとも小さな者、貧しい者、苦しんでいる者、倒され辱められている者を守るために自ら立ち上がられる歴史の主のみ前で、2人の母親たちによって語られた信仰宣言です。

5, 私たちが強調しようとしているもう一つのテーマは、さらに親密にアンナに関わっています。「子のない女が子室に恵まれ、子を持つ女は悲しみに沈む」(I サムエル 2:5)。運命の逆転をもたらす主は命と死の原因でもあるのです。アンナの子を産めない胎は、墓のようなものでした。しかし、神はそこから命をもたらすことができたのです。なぜなら、「あらゆる生きているものと息あるすべての人は神の手の中にある」(ヨブ 12:10)からです。すぐ後で、これに関連して、アンナは次のように歌っています。「神はいのちを奪い、またいのちを与えられる。死の国に下し、また引き上げられる」(I サムエル 2:6)。

ここにおいて、希望は生まれた子どもの命に関わるだけでなく、死んだ後にも神が元に

戻すことがおできになる命にも関わっています。こうして、復活という「過越し」の地平線が開かれます。「死んでいたものたちよ、生きよ。その体は起き上がれ。塵に伏す者達よ、起きて喜びの歌を歌え。なぜなら、あなたの露は光の露であり、死者の国にそれを降らされるからだ」(イザヤ26:19)。

## 第2週 水曜日 朝課 第3唱和

### 詩編 97

1, 復活の時キリストの弟子たちの共同体を満たしていた光、喜び、平和は、復活祭の八日間の喜ばしい日々ここに集まった私たちにもみなぎっています。これらの日々に、私たちはキリストが悪と死に打ち勝ったことを祝っています。彼の死と復活によって、神が望んでおられる正義と愛の王国は永遠に打ち立てられたのです。

今日、私たちは詩編 97 について考察するこのカテケジスにおいて、神の国に焦点を当ててみたいと思います。この詩編は荘厳な宣言によって始まっています。「主は治められる(神は王)。世界よ、喜びおどれ。島々は叫びをあげよ」。また、この詩編は神である王、宇宙と歴史の主の祝いとして定義付けられています。私たちはこの詩編を「復活祭」の詩編と呼ぶことができます。

私たちは、イエズスが説教において神の国を宣言なさることの重要性を知っています。それは、自分の創造主に頼っている単なる被造物としての認識ではありません。歴史におけるみ業には、神が望んでおられる調和と善についての企て、計画、戦略もあるのだ、という確信です。イエズスの死と復活という過越しの神秘はこれを成就したのです。

2, 朝の祈りのために典礼が差し出しているこの詩編を読んでいってみましょう。トランペットが鳴り響くように王としての主に向かって上がった歓呼の叫びのすぐ後で、ここで祈っている人の前に偉大な神の顕現があらわになります。他の詩編や預言書、特にイザヤの幾つかの節を引用したり言及したりする手段を用いながら、詩編作者は、雲、厚い闇(霧)、火、いなずまといった一連の宇宙の働きや力に囲まれて現れる偉大な王のこの世界という舞台への登場を描写しています。

このテーマにそって、正義、権威、栄光というもう一つのグループが参加して、歴史における神のみ業を響かせています。この登場によって、すべての被造物は震えます。もっとも遠く離れた場所とみなされていた島々を含むあらゆるところで大地は喜びおどります(詩編 97:1 参照)。稲妻のひらめきは全世界を照らし、地震が世界を震えおののかせます(詩編 97:4 参照)。聖書の宇宙観によれば、最も古く確固とした現実の顕現である山々が、蠟のように溶けてしまいます(詩編 97:5 参照)。ミカが次のように歌っている通りです。「見よ、主は御自分の場所を出ておいでになる。…山々は彼の前に溶け、谷は炎の前におかれた蠟のように砕かれる」(ミカ 1:3-4)。天使たちは、主が義人のために成し遂げてくださった救いのみ業、正義をあげて賛美の歌で天を満たしています。最後に、全人類は、敵であるよこしまな者、不正な者が主の裁きの抵抗できない力の前で降参して(恥をうけて)いる間に(詩編 97:3 参照)、神の神秘的な現実である神の栄光の啓示を観想します(詩編 97:6 参照)。

3, 宇宙の主の出現の後、この詩編は、偉大な王と彼の歴史への入場に対する2つの反応を描いています。一方では、偶像に仕える者と偶像とは地にひれ伏して恥を受け、打ち負かされま

した。他方では、主に誉れを帰する典礼の祝いのためにシオンに集まった信者たちは喜びに満ちて賛美の賛歌を立ち昇らせます。「偶像を仕える者」の場面は本質的なものです(詩編 97:7-9 参照)。偶像は唯一の神の前にひれ伏し、仕える者たちは恥に覆われます。倫理的惨めさと隷属の原因であるうそと偽りの信心を追い出す神の裁きによって正義は高められます。集まったものたちは、はっきりとした信仰の宣言を唱えます。「神よ、あなたは世界の上に高く立ち、すべての神々を越えて偉大な方」(詩編 97:9)。

4, 偶像とそれを拝む者たちへの勝利を示す場面に対して、信じる者たちの輝かしい日と呼ぶことのできるものの様子が置かれています。実際、正しい人のための夜明けの光が描写されています(詩編 97:11 参照)。それは、喜び、祝い、希望の夜明けです。よく知られているように、光は神の象徴だからです(I ヨハネ 1:5)。

預言者マラキは宣言しています。「私の名を恐れるあなたのために、義の太陽が昇り、その翼には癒しがある」(マラキ 3:20)。光と幸福とが一緒に進んで行きます。「喜びは心の正しい人の上にある。神に従う人は神のうちにあって喜べ。そのとうとい名をたたえよ(感謝せよ)」(詩編 97:11-12)。

神の国は闇の国を凌駕する平和と落ち着きの源泉です。イエズスの時代のユダヤ人共同体は歌いました。「神を認めない者たちは正義の前に引き退く。ちょうど、闇が光から退いていくように。神を認めない者は永遠に消え去る。義人は、太陽のように、この世界の秩序の始まりとなるために現されることになる」(クムランの神秘の書:1Q 27, 5-7)。

5, しかしながら、この詩編を離れる前に、王である主のみ顔に寄り添っている、信じる者の輪郭を再発見することは重要です。完全さと充満のしるしである7つの特徴が描かれています。神である偉大な王の到来を待っている人々は悪を憎み、主を愛し、義の道を歩み、「hasidim 忠実な者」(詩編 97:10 参照)すなわち心の正しい人で(詩編 97:11 参照)、神のみ業を喜び、主の聖なるみ名に感謝を捧げる人(詩編 97:12 参照)です。私たちの顔にこれらの霊的な特徴を輝かせてくださるようにと主に願いましょう。

## 第2 木曜日 朝の祈り 第1 唱和

### 詩編 80

1, ただ今、拝聴いたしました詩編は、ひとつの哀歌、イスラエルの民全体から立ち昇ったひとつの嘆願であります。

最初の部分では、牧者という有名な聖書的シンボルが用いられています。主は、「イスラエルを牧するかた」、「ヨセフを羊の群れのように導くかた」(詩編 80:2)と呼びかけられています。契約の櫃の上の高みから、ケルビムの上に座し、主は御自分の民である御自分の群れを導き、危険から守っておられます。

荒野を横切っている間中、主はそのようになさっておられました。しかし、今、眠っておられるのか、あるいは無関心になってしまわれたかのように、不在であるように思われます。御自分で導き養うはずの群れ(詩編 22 参照)を、ただ涙のパンで養うばかりです(詩編 80:6)。敵が、この卑しめられ、嫌われている民をあざけりの的としています。それなのに、神は心を動かされることも、「光りを放って」(詩編 80:3)ご自分の力を現すことも、暴力や圧迫の餌食となってしまった者たちを守るために戦うつもりもないようです。アンティファンのような祈願

の繰り返し(詩編 80:4, 8)は、神をその無関心な態度から呼びさまそうと願っています。こうして、神は再び御自分の民の牧者と守り手となるために立ち戻ってくださることになるのです。

2, 緊張感に溢れ、信頼に満ちたこの祈りの第2の部分では、聖書にとってなじみ深いもうひとつの象徴を見出すことができます。それは、ぶどうの木です。ぶどうの木は約束の地の光景に属する実り豊かさや喜びの象徴であるがゆえに、理解しやすいイメージなのです。

イザヤ預言者がもっとも高尚で詩的な箇所(イザヤ 5:1-7 参照)において教えている通り、ぶどうの木はイスラエルを具現化したものです。それは、2つの根本的な事柄を描いています。第1に、神によって植えられたこと(イザヤ 5:2, 詩編 80:9-10 参照)、神の賜物、恩恵、愛を表現しているのです。一方、ぶどう酒を産み出すぶどうの実を収穫するためには、農夫たちの労働を必要とします。これは人間の側の応答、各自の努力、善い行いという実を結ぶことを象徴しています。

3, ぶどうの木のイメージを通して、この詩編はヘブライ人の歴史の道標となる大きな出来事を思い起こさせます。彼らのルーツ、エジプトからの脱出の体験と約束の地への入国です。ぶどうの木はソロモンの統治の時代、パレスチナ一体とその周辺へと広がって、その拡張の最高の度合いにまで達しました。実際、彼の統治は、北はレバノン杉の生い茂る山地から、地中海にまで達し、大河ユーフラテスにまで及びました(詩編 80:11-12 参照)。

しかし、この輝かしい繁栄は遮られてしまいます。この詩編は私たちに、荒れ狂う嵐が神のぶどう畑を襲ったことを思い起こさせます。つまり、イスラエルは、約束の地を略奪する荒々しい侵入という厳しい試練に苦しんだのです。神御自身が、あたかも侵入者であるかのように、このぶどう畑を囲む囲いを、昔から伝統的に獰猛で不潔な動物と見なされてきた猪によって象徴されている略奪者たちに破壊させることによって、倒してしまわれたのです。すべてのものを荒らしまわる敵の略奪者たちを象徴している、あらゆる野生の獣たちが、猪の獰猛さに加わります(詩編 80:13-14 参照)。

4, こうして、詩編作者は神に向かって、沈黙を破って立ち戻り、この犠牲者たちをお守りくださるようにと直接に懇願します。「すべてを治める神よ、あなたの目を注いで、またこのぶどうの木を顧みてください」(詩編 80:15)。このように激しい嵐にもてあそばれていたこのぶどうの木の生き残った切り株のために、神は再び守り手となってくださり、このぶどうの木を台無しにしようとしたり、火を放ったりした者たちを打ち払ってくださるのです。(詩編 80:16-17 参照)

ここで、この詩編はメシア的希望へと開かれていきます。18節では、詩編作者は次のように祈っています。「あなたの手はあなたの右腕である人の上に、強められた民の上に。」おそらく、詩編作者は、最初は、主の助けによって民を解放するために立ち上がるダビドのような王を意図していたことでしょう。しかし、預言者ダニエルによって歌われ、イエズス御自身が御自分のみ業とメシアとしてのあり方を定義するために好んで用いるタイトルとしてお選びになった「人の子」は、未来のメシアを含蓄していることは確かです。教会の教父たちは、詩編作者が描写しているぶどうの木は、「まことのぶどうの木(ヨハネ 15:1)」であられるキリストと彼の教会の預言的前表であると異口同音に指摘しています。

5, もちろん、主のみ顔が再び輝きを放つなら、イスラエルは私たちの救い主である神への忠実さと祈りを通して立ち戻るのである。詩編作者が次のように宣言する時、このことを言っています。「わたしたちはあなたから離れることなく、いのちであるあなたを呼び求める」(詩編 80:19)。

このように、詩編 80 は、苦しみにによって、また、崩れ去ることのない信頼によって力強く

特徴付けられている歌となっています。神は、いつでも御自分の民のもとに「立ち戻る」準備がありますが、神の民の方でも忠実さをもって神に「立ち戻る」のでなければならないのです。私たちが罪から立ち戻るなら、主は罰をくだすという御意志を思い直してくださるのです。このことが、私たちの心にまでこだまして届き、希望へと開かれていくことが、詩編作者の言わんとしていることなのです。

## 第2週 木曜日 朝課 第2唱和

### イザヤ 12

1,ただ今朗読された賛歌は、朝の祈りの中で喜びの歌として現れています。イザヤ書の中でメシア的な箇所として知られている部分の結びです。「エマヌエルの書」として知られている6-12章を含んでいます。事実、ダビデ王朝に属する歴史上の一人の権威ある人物に対して語られているこれらの預言的な言葉の中心には、理想的な人物像が啓示され、栄光あるタイトルが付されています。「驚くべき指導者、力ある神、永遠の父、平和の君(イザヤ9:6)」

当時の支配者アハズ王の息子であり跡継ぎであるユダの王の具体的な人物像は、ダビデの理想からはかけ離れたものであったことが知られていますが、イザヤが約束しているのは、それよりもはるかに高尚な約束のしるしでした。すなわち、「神が共におられる」、文字通り人間の歴史の中に神が完全に現存するようになる、「エマヌエル」という名の成就をもたらすことになっていた、油注がれた王についての約束のしるしでした。どのようにして、新約聖書とキリスト教が、私たちと連帯するために人となられた神の御子イエズス・キリストの個人的な人物像にこの王の面影を当てはめたかを理解するのは容易なことです。

2, 私たちが考察している賛歌(イザヤ 12:1-6 参照)について、現在、学者たちは、その文学類型と全体的な文脈を根拠に、キリストより8世紀前に生きた預言者イザヤよりも後の時代に書かれた賛歌であると考えています。事実、それはいくつかのテーマを繰り返しています。救い、信頼、喜び、神のみ業、民の間におられる「イスラエルの聖なるかた」の現存です。この表現は、神の「聖なる」超越性と、イスラエルの民が頼みとしている神の愛深く生き生きとした親しさと、その双方を示す表現です。

歌い手は、苦い体験を持ったことがある人で、神の裁きのみ業を感じていました。しかし、今、試練は過ぎ去り、清めは成し遂げられました。神の怒りに取って代わる微笑みがあり、神は救いと慰めを備えてくださっています。

3, この賛歌の2つの節は、すでに取り上げてきましたように、2つの時を描き出しています。まず、祈りへの招きです(イザヤ 12:1-3 参照)。「その日、おまえたちは叫ぶ」。ここに、「救い」という言葉が現れてきます。三度も繰り返され、主に対して述べられています。「神はわたしの救い、…わたしの救い…救いの泉」。イザヤが好んで用いる名、「救い」をもたらすことを示すヘブライ語の「yasa」という語源を含むイエズスの名を思い出しましょう。この理由から、祈っている人は、神の恵みが自分の解放と希望の根であるという絶対的な確信を抱くのです。

「主はわたしの力、わたしの守り、わたしの救い」(出エジプト 15:2)。というモーセの解放の歌の言葉を引用しながら、エジプトの奴隷状態からの脱出という偉大な救済的できごとに、それとなく関連付けていることに気がつくことは重要です。

4, 試練の闇に閉ざされた日にも喜びと信頼を花ひらかせてくれる神によって恵まれた救い

は、水という聖書における伝統的なイメージによって描写されています。「喜びに心をはずませ、救いの泉から水をくみ…」(イザヤ 12:3)。これは、イエズスがサマリアの女に、彼女自身の中に「永遠の命へと湧き出す水の泉(ヨハネ 4:14)」を持つ可能性があるということを示した時の彼女の感覚を、私たちに思い起こさせてくれます。

アレキサンドリアのチリロは、素晴らしい方法で解説しています。「イエズスは、生ける水、聖霊という命を与える賜物へと招いておられます。この生ける水である聖霊によってのみ、山々の上の木の幹のように乾ききって、悪魔の策略によってあらゆる徳を奪い去られ、まったく見捨てられていようとも、人間はその本性が以前にもっていた美しさを取り戻させていただけなのです。…救い主は、水である聖霊の恵みに招いておられます。人がこの水である聖霊に分け与かるならば、自分の内に神の教えの源泉を持つことになるので、これ以上、他の人々からのアドバイスは必要でなくなり、神のみ言葉に乾く人々に勧告を与えることができるようになるのです。聖なる預言者たち、神の使徒たち、その後継者たちは、その務めにおいて、この地上に生きていた間、そのようでした。彼らについて、次のように書かれています。『喜びに心をはずませ、救いの泉から水をくみ…』(ヨハネ福音書講話, II, 4)。

不幸にも、預言者エレミアが悲しみを持って指摘しているように、人間はたびたび、人間の全存在の乾きを癒してくださるこの泉を見捨ててしまいます。「彼らは生ける水の泉であるわたしを見捨て、自分たちのために水ためを掘った。水をためることのできない壊れた水ため」(エレミア 2:13)。イザヤも、数ページ前に、シオンにおられる主の象徴として「ゆるやかに流れるシロアの水」を称揚し、軍事的経済的力と偶像との象徴である「川の水、その名はユーフラテス、偉大にして力強い」の氾濫という懲らしめが来ると威嚇しました。ユダの魂を奪ったこの水が、やがて彼女を溺れさせるであろうというのです。

[預言者は、生ける水の泉に来るようにとすべての国民を招く]

5, 「その日、おまえたちは叫ぶ」という、もうひとつの招きをもって、第2部が始まります(イザヤ 12:4-6 参照)。それは、主の誉れに対する喜ばしい賛美への絶え間ない呼びかけです。賛美するよという命令は、増大の一途をたどっています。「神をたたえ、その名を呼ぼう。神のわざを、すべての民に伝え、その誉れを告げよう」。

この賛美の中心には、神が昇ったり下ったりするのに合わせながら、歴史の中で働かれ、御自分の被造物のそばにおいでになる、救い主である神に対してなされるまたとないユニークな信仰の表明があります。「神は不思議なわざをなしとげられた。…イスラエルの聖なるかたは、おまえたちの中で偉大」(イザヤ 12:1-6)。この信仰宣言は、宣教の働きもしています。「そのわざを世界にのべ伝えよう。イスラエルの聖なるかたは、おまえたちの中で偉大」(イザヤ 12:4-5)。彼らが勝ち得た救いは、世界に向かって証しされなければならないのです。こうして、全人類は、平和と喜びと自由の泉に走り寄ることになるのです。

第2週 木曜日 朝課 第3唱和

## 詩編 81

1, 「祭りの日、新月と満月の日に、角笛を吹き鳴らせ(詩編 81:4)」。ただ今私たちが宣言したばかりの詩編 81 の中の言葉は、古代イスラエルの太陰暦による祭日の典礼に由来しています。この詩編が述べているのがどの祝い日であるのかを判別するのは困難です。聖書の祝祭暦

が、季節や自然界のサイクルに基礎をおいていることは確かですが、それはまた、救いの歴史、特に、第一の月の満月の日に関連しているエジプトの奴隷状態からの脱出という重要な出来事にしっかりと基を置くことによって存在していることは明白です（出エジプト 12:2, 6; レビ 23:5 参照）。ここにおいて、神は解放者と救い主として啓示されています。

この詩編の第7節が詩的に述べている通り、神は、エジプトのピトムとラムセスの街を建設するために必要な煉瓦を満載した籠を背負ったヘブライ人の奴隷たちに御自身を啓示なさいました（出エジプト 1:11, 14 参照）。神は圧迫されている民のそばに立ち、白日のもとで背中に負わされていた煉瓦の詰まった籠を御自分の力によって取り去っていただきました。この籠は、イスラエルの子らが強制されていた重労働のシンボルでした。

2, このイスラエルの典礼の歌がどのようにして展開していくかを見ていくことにいたしましょう。この詩編は、祝い、歌い、音楽を奏するようという招きをもって始まります。これは、過ぎ越しの祝いと共にエジプトにいた時にすでに誕生していた礼拝の古い形式による典礼的な集会の正式な召集です。この呼びかけの後、主御自身の声がシオンの神殿にいる祭司の託宣を通して現され、主の神のみ言葉がこの詩編の残りの部分を満たします（詩編 81:6b-17 参照）。

展開しているテーマは単純で、2つの考え方の両極の周りをめぐっています。一方では、圧迫された惨めなイスラエルに与えられた自由という神の賜物があります。「おまえは苦悩の中から呼び求め、わたしはおまえを助け出した」（詩編 81:8）。この詩編はまた、困難と試練という状況の中で荒野を旅するイスラエルに対する主の支え、メリバの水の賜物に言及しています。

3, 一方、神の賜物に伴われて、詩編作者はもう一つの素晴らしいことを紹介します。聖書で言われている宗教は、神の孤独な独白や、実現されることのない運命にある神の御業ではありません。かえって、それは、対話であり、受け答えによって続けられていく言葉であり、受け入れるようにと呼びかける愛の行為です。この理由から、神がイスラエルに対して語っておられる招きには、広い空白が与えられています。

主はまず最初の命令、すなわち十戒全体の柱である、唯一の主であり救い主への信仰と偶像への拒絶を忠実に遵守するようにと招きます（出エジプト 20:3-5 参照）。司祭たちが神の御名を呼ぶことに関する御言葉は、シナイの掟に対する忠実な従順を表現し、解放の賜物へのイスラエルの返答の印であり、申命記にとって大切な動詞である、「聞け」という動詞によって強調されています。事実、私たちは、この詩編 81 の中で繰り返し聞くこととなります。「民よ、聞け、わたしの戒めを、イスラエルよ、わたしのことばを守れ。…しかし、民はわたしの声を聞かず、イスラエルは私に従わなかった。…民がわたしのことばに従い（聞いて）…」（詩編 81:9, 12, 14）。

忠実に聞き従うことだけが、民に、主の賜物を十全に受け取れることを可能にしてくれるのです。残念なことに、神はイスラエルの多くの不忠実な者たちに対して厳しさをもって臨まなければなりません。詩編作者が言及している荒野の旅は、金の子牛の登場においてクライマックスを迎える、抵抗と偶像崇拝の数々の行為によって覆われています。

4, この詩編の最後の部分（詩編 81:14-17 参照）は、哀愁を帯びた色合いを持っています。事実、神はいまだ満たされていない一つの憧れを表現しています。「民がわたしのことばに従い、イスラエルがわたしの道を歩むなら（詩編 81:14）」。

しかしながら、この憂いは、愛によって靈感を受けており、選ばれた民が良いもので満たされるようという神の深い憧れと一つになっています。もし、イスラエルが主の道を歩むなら、まもなくその敵を抑えることができ（詩編 81:15 参照）、主は彼らを「よい麦」で養い、「岩か

ら出るみつ」で満たしてくださるというのです（詩編 81:17 参照）。この「岩から出るみつ」は、聖書の中に繰り返し登場するテーマである繁栄と完全な幸福の表れである約束の地（申命記 6:3, 11:9, 26:9, :15, 27:3, 31:20）の岩から流れ出ているようです。蜜を塗った焼きたてのパンの楽しい会食。この素晴らしい眺めを差し出しながら、主が望んでおられるのは、明らかにこれまで以上に寛大な御自分の愛に対する、御自分の民からの誠実な応答と現実味のある愛と回心です。

キリスト教的解釈においては、神が差し出しておられるものは、それが成就した形で表現されています。オリゲネスは次のような解釈を私たちに示してくれます。主は「彼らを約束の地に導き入れてくださいました。そこにおいて、主は荒野でなさったようにマンナで彼らを養うのではなく、地に落ちて復活なさった麦（ヨハネ 12:24-25）で養ってくださいるのです。…この麦こそはキリストその方なのです。また、彼は荒野で御民の乾きを癒した水の湧き出た岩でもあられます。霊的な意味において、キリストは水ではなく蜜で彼らを養ってくださいます。ですから、この食べ物を信じて受け入れるすべての人は自分たちの口で蜜を味わうことでしょう。（詩編註解 74）」

5, 救いの歴史においてはいつもそうであるように、神とその罪深い民とは対照的であっても、切り札となる言葉は、決して裁きと懲らしめではなく、愛と許しです。神は裁いたり罪に定めたりすることではなく、人類を悪から救い解放することをお望みなのです。エゼキエル書の中で読んできた言葉を、神は私たちに向かって繰り返し続けておられます。「私が悪人の死を喜ぶだろうか。主のお告げ。むしろ、悪人が立ち返って生きることをこそ望む。…ああ、イスラエルの家よ、何故、あなたがたは死のうとするのか。私は誰の死をも喜ばない。主のお告げ。だから、立ち返って、生きよ。（エゼキエル 18:23, 31-32）」

典礼は、回心して、「あわれみ深く恵みに富み、怒るに遅く、いつくしみ深く、変ることのない愛に富み、忠実な（出エジプト 34:6）」神の抱擁へと立ち戻るようにという神の呼びかけを聞くための特別な場となるのです。

## 第2週 金曜日 朝課 第1唱和

### 詩編 51 2

1, 朝の祈りの典礼では毎週金曜日に Miserere、たいへん愛され歌われ黙想されている償いの詩編、詩編 51 を祈ります。償いを果たしている罪人からいつくしみ深い神へと立ち昇っていく賛美歌です。以前のカテケジスの時に、この偉大な祈りについて全般的に眺める機会がありました。まず何よりも、詩編作者は、罪の暗闇の国を、人間の償いと神のゆるしという光の中へと運ぶために、そこに入っていきます（詩編 51:3-11 参照）。それから、償いをしている罪人の霊と心を変容させる神の恵みの賜物を称揚するために進んでいきます。そこは希望と信頼に満ちた光の場所です（詩編 51:12-21 参照）。

今回の考察においては、解説の鍵となるいくつかの用語を選んで詩編 51 の最初の部分について解説していこうと思います。始まりとして、この Miserere において賛美されている神の完全な肖像画であるシナイ山における素晴らしい宣言を示したいと思います。「主、いつくしみ深く恵みに満ち、怒るに遅く、揺るがぬ愛と忠実に富み、千代に渡って揺るがぬ愛を保ち、悪と過ちと罪をゆるす神」（出エジプト 34:6-7）。

2,ここで祈っている人は、まず最初に神に向かって、預言者イザヤが言うように、たとえ私たちの罪が「真紅」で「紅のように赤く」(イザヤ 1:18 参照)とも、「雪のように白く」していただく浄化の恵みを祈っています。詩編作者は、恥じることなく自分の罪をあからさまに告白します。「わたしは自分のあやまちを認め、…わたしはあなたに罪を犯し、悪を行い、あなたにそむいた」(詩編 51:5-6)。

今、自分の過った行いを誠実に認める準備が整った罪人の個人的な良心の働きの中に入っていきます。この体験は、自由と責任を含んでおり、自分が絆を断ち切ってしまったこと、神のみ言葉によるのではなく別なものによって生活を立て上げることを優先してしまったことを自覚するようにと彼を導きます。その効果は、変わろうという徹底的な決心です。これらのことはすべて、ヘブライ語では単なる知的な同意を表すだけでなく、生き生きとした選択を表現している「認める」という動詞に含まれています。

オリゲネスが警告しているように、残念なことに、多くの人々はこの段階を踏んでいません。「罪を犯した後で、まったく平和で自分の罪をそれ以上考えない人がいます。また、自分が犯してしまった悪の意識によって悩みますが、何もなかったかのように生活している人がいます。このような人々は、確かに、次のように言うことはできません。罪は私の目の前にある、と。こうして、私たちが同意してしまった罪を私たちの心の目の前に置く時、人は惨めさを感じ、そのために悩まされ、良心の咎めによって絶え間なく攻め立てられ、猶予なしに苦しめられ、それを否定しようとする自分の霊の中に内的な反感を経験します。その時、正しくも彼は叫ぶのです。私の罪は私の骨を休ませてくれない、と。それから、私たちが目の前にそのひとつひとつを眺め、それらを認め、私たちが犯してしまったことに恥じ入って償いをする時、罪に同意した後…」(オリゲネス、詩編についての説教 Florence, 1991, p. 277-279)、罪の自覚と意識は、神のみ言葉の光を通して要求された感受性の実りです。

3, Miserere の告白には、特筆すべき強調点があります。罪が、単に個人的で「心理学的」次元のこととして描写されているだけではなく、何にもまして神学的現実として描かれているということです。罪人は叫びます。「わたしはあなたに罪を犯し」(詩編 51:6)ました。伝統的に、この叫び声をあげているのは、バトシェバとの姦淫と、この罪と彼女の夫ウリアの殺害に対する預言者ナタンからの非難とを自覚したダビドとされています(詩編 51:2, II サムエル 11-12 参照)。

罪は単なる心理学的社会的できごとではなく、神との関係の腐敗です。神の掟に対する暴力行為であり、歴史の中にある神の御計画を否定することであり、神がお定めになった価値観をくつがえすことです。「光の代わりに闇を、闇の代わりに光を置く」こと、あるいは、「善を悪と呼び、悪を善と呼ぶ」ことです(イザヤ 5:20 参照)。最終的に人を傷つける前に、罪はまず最初に神への裏切りです。放蕩息子が、愛情あふれる父親に向かって語った言葉がよく表現しています。「お父さん、私は天に対しても(つまり神に対しても)、またあなたに対しても罪を犯しました」(ルカ 15:21)。

4,ここで、詩編作者は人間の現実さらに直接的に関係する観点を紹介しています。この箇所は、多くの翻訳がなされ、原罪に関する教義に関連づけられています。「わたしは生まれた日から悪に沈み、母の胎に宿った時から罪に汚れていた」(詩編 51:7)。ここで祈っている人は、あきらかに、人間存在の源泉のはじまり、存在全体を表現する方法として、妊娠と誕生について考えることによって、私たちの存在全体の中の悪の存在を指摘しようとしています。しかし、詩編作者は、公に自分の状態をアダムとエバの罪に関係付けることはしません。彼は原罪について明白に語っているわけではありません。

それでも、この詩編によれば、悪は人間の最も深い所に由来しており、彼の歴史的な現実を生来備わっていることは明らかです。ですから、神の恵みの仲介を願うのはきわめて重要です。神の愛の力は、罪の力に勝るものであり、悪の激流は、ゆるしという実り豊かな水よりも力が劣っているのです。「罪の増すところに、恵みはさらに増し加わるのです」(ローマ 5:20)。

5,このような方法で、原罪の神学と罪人としての人間の聖書的な観点は同時に恵みと救いの光に入っていく悟りを与えてくれる道を、間接的に思い起こさせてくれます。

この詩編の後半の部分に再びもどる時、発見する機械がもてるでしょうが、罪の告白と自分の惨めさについての自覚は教父や裁きの悪夢に導くのではなく、まことの清め、解放、新しい創造への希望に導いてくれるのです。

事実、神は私たちを救ってくださるのですが、それは「私たちの正しい行いによるのではなく、神のいつくしみの力により、私たちの救い主イエズス・キリストを通して豊かに注がれた聖霊による再生と刷新の水洗いによるのです」(テトス 3:5-6)。

## 第2週 金曜日 朝課 第3唱和

### 詩編 147:12-20

ただ今私たちが唱えた *Lauda Jerusalem* は、地の表を「すばやく走る」神のみ言葉と、人類の飢えを満たすために神が寛大にお与えくださる「よい麦」である御聖体(詩編 147:14-15 参照)について言及している詩編 147 をたびたび用いてきたキリスト教典礼にとって親しみ深いものです。

1, 聖ヒエロニモによって翻訳されて西方教会に広められた、ある説教の中でこの詩編について解説したオリゲネスは、まさかと思うかもしれませんが、御聖体と神のみ言葉を混ぜ合わせています。「私たちは聖書を読みます。私は、福音とはキリストの体であると信じています。私は、聖書は彼の教えであると信じています。そして、彼が『私の肉を食べ、私の血を飲むものは』と仰せになった時、これらのみ言葉が御聖体の秘跡について言及したものであったとはいえ、キリストの御体と御血はまことに聖書のみ言葉、神の教えです。私たちが御聖体の神秘を拝領した時、たとえほんのわずかなひとかけらが落ちて、私たちは損失を感じます。私たちが神のみ言葉を聞いている時、私たちの耳は神のみ言葉でありキリストの御体と御血であることを理解しながら、他のことを考えているとしたら何と大きな危険に落ち込むことでしょう」(詩編に関する 74 の説教 Mirano1993, pp. 543-544)。

聖書学者たちは、この詩編が、一つの作品として、その前の詩編とつなげられるべきだと指摘しています。ヘブライ語原典でもそのような場合があります。事実、私たちは主によって成し遂げられた創造と贖いに誉れを帰して一つの一貫した歌を持っているのです。それは、喜びに満ちた賛美への呼びかけで始まっています。「神をたたえ、賛美の歌をうたおう。わたしたちの神をたたえることは、美しく正しい」(詩編 147:1)。

2, 今拝聴したばかりの部分に焦点を当てるなら、主を賛美し栄光を帰するために聖なる都エルサレムへと招くことによって紹介されている、賛美のための3つの時を見分けることができます(詩編 147:12 参照)。

第1部(詩編 147:13-14 参照)では、神の歴史におけるみ業が言及されています。主のご保護、シオンの都とその子らに対する主の支えを描き出す一連のシンボルについて述べられていま

す。何よりもまず、エルサレムの門を堅固なものとし、難攻不落なものとしている「かんぬき」についての言及があります。おそらく、詩編作者は、バビロン捕囚という苦い体験の後で聖なる都を建て直し堅固なものとしたネヘミア(ネヘミア 3:3, 6, 13-15, 4:1-9, 6:15-16 参照)について言及しているのでしょう。他のさまざまなものの中で、門は都全体が堅固さと平静さの内にあることを表すしるしです。都の中では、安全な母胎の中にいるかのように、神の祝福というご保護のマントに包まれて平和と落ち着きを楽しんでいるシオンの子ら、つまり市民たちが暮らしています。

喜びに満ちた平静な都のイメージは国境に平和をもたらしもっとも高く貴重な平和によって称揚されています。しかし、聖書にとって、平和—shalom は、単に戦争がないことを思い出させるという消極的な概念ではなく、幸福と繁栄という積極的な賜物であり、詩編作者が、優良な穀物、穂の中に実の詰まった「よい麦」で満たされていると述べています。ですから、エルサレムの城壁を固めてくださった主は(詩編 87:2 参照)、ご自分の祝福を降らせ(詩編 128:5, 134:3 参照)、それを国中に広げ、平和を与えて(詩編 122:6-8 参照)ご自分の子らの飢えを満たしてくださった(詩編 132:15 参照)のです。

3, この詩編の第 2 部(147:15-18 参照)には、神が何にもまして創造主として現れています。実際、2 度にわたって、神は、存在に源泉を与えるみ言葉と創造のみ業とを関連付けています。「神は言われた。『光あれ。』そして、光があった…神は地に命令をつかわされた(命じて仰せになった)。…神はご自分のみ言葉をつかわされた。」(創世記 1:3, 詩編 147:15, 18 参照)。

ここで、神のみ言葉という旗印のもとに、2 つの基本的な季節がほとぼしり出て、しっかりと固められます。一方には、主の命令が、綿のような白い雪、灰のような霜、パン屑のようなあられ、すべてを凍らせる氷によって生き生きと描かれている冬を地上に降らせます(詩編 147:16-17 参照)。もう一方では、もう一つの神の命令が暖かな風を吹かせ、夏をもたらして氷を溶かします。こうして雨水と清流とが自由に流れ、大地を水で潤し、実りをもたらします。

このように、神のみ言葉が寒さと暑さ、季節の循環、自然界の命の泉の源となります。人類は自分たちを囲み、息をすることをゆるし、養い支えてくれるこの世界という基本的な賜物のゆえに創造主を認識し感謝をささげるよう招かれています。

4, 私たちは今、この賛美の賛歌の第 3 にして最後の部分に移ります(詩編 147:19-20 参照)。私たちの始まりである歴史の主立ちもどります。神のみ言葉はイスラエルに律法すなわち啓示というより重要で貴重な賜物をもたらします。特別な賜物です。「神は他の民にまだ示されず、そのおきては知られていない」(詩編 147:20)。

こうして、聖書は、選ばれた民にとって愛と忠実な信心をもって引き寄せられるべき宝となります。このことは、申命記の中でヘブライ人たちにモーセが告げたことです。「今日、私があなた方の前においたすべてのおきてのように正しいおきてと法令とをもつ偉大な国民があらうか」(申命記 4:8)。

5, 創造と歴史という神の偉大なみ業が 2 つあるように、啓示もまた 2 つあります。1 つは自然界そのものの中に書かれていて、すべての人々に開かれています。もう 1 つは選ばれた民に与えられています。彼らは、聖書に含まれていることを全人類に証し、伝達することになっています。この 2 つは全く異なる啓示ではありますが、神は唯一であり神のみ言葉もまた一つです。ヨハネによる福音書の冒頭で述べられているとおりに、すべてのものはみ言葉によって造られました。存在するすべてのものは彼によって造られたのです。また同時に、み言葉は「肉」となられ、歴史にお入りになり、私たちの間にその幕屋を張られたのです(ヨハネ 1:3, 14 参照)。

詩編 92

1,ただ今私たちが拝聴いたしました、創造主である神に対する義人の歌である詩編 92 は、古代ヘブライ人の伝統において特別な位置を占めています。事実、この詩編に付されている表題は、この詩編が安息日に歌われていたことを示しています。それは、金曜日の日没に、祈りと観想、体と精神の落ち着いた静けさの聖なる日に入る時、いと高き(すべてを越える)永遠の主に向かって立ち昇っていく賛歌なのです。

いと高き神の偉大な人物がこの詩編の中心におかれています。彼は調和のとれた平和な世界に取り巻かれています。彼の前に立つのは、旧約の概念にとって好ましい義人であり、その正直で忠実な生活の自然な結果として幸福と喜びと長寿に恵まれています。これは、この地上においては常にあらゆる悪は罰せられ、あらゆる善行は報いられる、と述べている、いわゆる「報復の原理」についての言及です。この見方には真理の要素があるのですが、にもかかわらず、ヨブが直感し、イエズスが確証したとおり(ヨハネ 9:2-3 参照)、人間の苦しみの現実はずっと複雑でそれほど単純ではあり得ません。実際、人間の苦しみは永遠の展望において眺められるべきなのです。

2,それでは、典礼的風貌をもつこの知恵に満ちた詩編について考察してまいりましょう。それは、賛美するようという熱烈な呼びかけを含む、喜びに満ちた感謝の歌であり、十弦の豎琴、ライア(七弦の豎琴)、リュートによって伴奏される祝いの音楽です。主の愛と忠実は「巧みに」演奏され典礼の歌によって祝われるべきものです(詩編 47:8 参照)。この招きは私たちの祝いにも当てはめられますので、言葉と儀式によってだけでなく、それらに伴うメロディによっても、祝いの輝きを再発見することになります。

信じる人のまことの絶え間ない息である内的外的祈りの糸を断ち切ることのないこの主張の後で、詩編 92 は、あたかも 2 枚の肖像画のように、悪人(詩編 92:7-10 参照)と義人(詩編 92:13-16 参照)の輪郭を差し出しています。悪人は、ご自分の敵を滅ぼし、悪を行う者をすべて追い散らす、「すべてを越えて…偉大」(詩編 92:9)である主のみ前に連れ出されます。事実、神の光の中においてのみ、私たちは善と悪、正義と邪悪との深みを理解できるのです。

3,罪人の姿は植物の世界からくるイメージによって描写されています。「あなたにさからう者が草のようにはびこり、不法を行う者が栄えても」(詩編 92:8)。しかし、この繁栄はしほみ、消え去っていく運命にあります。実際、詩編作者は、荒廃を描写する動詞や名詞を重ねています。「かれらはあとかたもなく滅びさる。…あなたにはむかう者は滅び、不法をおこなう者はすべて散らされてゆく」(詩編 92:8, 10)。

この悲劇的な結末の根源は悪人の思考と心を掴む深い悪です。「心の鈍い者にはわからず、愚かな者には悟れない」(詩編 92:7)。ここで用いられている形容詞は、知恵に関する言葉に属し、倫理的な結果を考慮せずに地上で思いのままにふるまうことができると考え、神は不在で無関心なのだ、と自らを欺いている人々の野蛮さ、盲目、おろかさを表現しています。ところが、ここで祈っている人は、遅かれ早かれ、主は正義を打ち立て、愚かな人々の傲慢を打ち砕くために、地平線にお現れになると確信しています(詩編 14 参照)。

4,ここで私たちは、たくさんの豊かな色彩で描かれている義人の姿の前に立ちます。ここではまた、詩編作者は新鮮で輝くような緑の植物のイメージを用いています(詩編 92:13-16 参照)。輝いてはいても短命な野の草である悪人とは反対に、義人は椰子の木やレバノン杉のように天に向かってそびえ立ち、がっしりとして威厳があります。義人は「神の庭で栄える」(詩編 92:14)

のです。彼らは、健全で安定した特別な神殿との関係、つまり彼らの内にご自分の住まいを定められた主との関係をもっています。

キリスト教の伝統も、ヘブライ語で「椰子の木」にあたる言葉を翻訳するために使用されているギリシア語の「Phoenix」という語を、二重の意味で利用しています。皆様ご存知の通り、フェニックスは、自分の灰から再び生まれると信じられていることから、不死のシンボルでした。キリスト者たちは、新しい命の源であるキリストの死に与ることによって、同じように灰からの再生に与ります(ローマ 6:3-4)。エフェソの教会への手紙は語っています。「しかし、神は…自らの違反によって死んでいた時にさえ、私たちをキリストとともに生かし、彼とともに立ち上がらせてくださいました」(エフェソ 2:5-6)。

5, 動物の世界からのもう1つのイメージが、義人を表現し、神が高齢者にさえも惜しみなくお与えになる力を称揚しようとしています。「あなたはわたしの頭を野牛の角のようにあげ、わたしに新しい油を注がれた」(詩編 92:11)。一方で、神の力という賜物は人を勝利者とし、安全を与えます(詩編 92:12 参照)。他方、義人の栄えある額はエネルギーと保護をもたらす祝福に輝く油で塗油されます。こうして、この詩編 92 は、音楽と歌によって力づけられた楽天的な賛歌となります。悪人の明らかな成功を目の当たりにする時でさえ、落ち着きと平和の源である神への信頼を祝うのです。安全と実り豊かさの内に生かされるための時である高齢期に達した(年を経た)としても(詩編 92:15 参照)そこなわれることのない平和です。

この詩編作者が神に向かって「わたしに新しい油をそそがれた」(詩編 92:11)と語りかけている一節によって靈感を受けたオリゲネスの言葉を聖ヒエロニモが翻訳しています。この言葉によって終わることにいたしましょう。オリゲネスは次のように解説しています。「私たちが高齢になれば神の油が必要になります。私たちの体が疲れ果ててしまった時、ただ油を塗ってもらっただけで生き返ったように感じるのと同じように、また、私たちが油を足さなければランプの炎が消されてしまうように、年取った私の炎は神のいつくしみの油によって燃え立たせていただく必要があるのです。使徒たちも、疲れ果て、彼らのランプに主の油が必要になったので、主の油から光をいただくためにオリーブ山に登りました(使徒 1:12)。…ですから、私たちの高齢期とそのあらゆる労苦と暗闇が主の油によって火を灯していただけるように祈りましょう」(74 の詩編解説, Mirano1993, pp. 280-282, passim)。